

昭和四八年三月二〇日

新潟県長岡市関原町

馬高・三十稻場遺跡緊急調査報告書

長岡市教育委員会

一 目 次

遺跡の所在 遺跡の沿革

□ □ □ □

△検索

○検索調査経過

△三十稻場

△ 発掘編

○ ○ ○ ○ 馬 ○ 三十稻場
三 三 馬 馬 三 十 稻 場
十 十 高 高 三 十 稻 場
稻 稻 場 場 高 高 三 十 稻 場
場 場 | | | | | |

別冊 結語

馬高・三十稻場遺跡緊急調査報告書

長岡科学博物館考古研究室 中村孝三郎

□ 遺跡の所在 馬高、三十稻場遺跡は新潟県長岡市関原町一丁目にあって、遠藤沢の水田小谷をめぐる小字中原、遠藤、糠山一帯の九〇、〇〇〇m²の広い地域にわたつてゐる。

遺跡の沿革

この二つの遺跡は、東馬高と西馬高（三十稻場）とも通称され、明治と大正年間から広く知られた先史時代の繩文期の遺跡で、また越後考古学発生の地でもある。古くから大野雲外（考古画家）、浜田青陵（京大総長）、大場磐雄（国学院大学）、八幡一郎（東大・人類学教室）氏等の多くの著名学者の訪跡があり、また昭和一〇年以来、地元研究者の故近藤勘治郎、篤三郎父子（近藤考古館）の六年間の発掘が続けられ、おびただしい遺物が発見され、「アジアを代表する世界的な火焰土器」をはじめ、信濃川沿岸の古代文化をしめす一三〇余点の復元土器や、呪術的な土偶や、三角土版や、土製の耳かざりなどが明らかにされた。（註1）

また、昭和一五年五月にはオランダの考古学者ジエラード・グロート氏の三十稻場の発掘があり、戦後になつては、昭和二五年七月に、早稲田大学考古学研究室の滝口広、西村正衛両教授、玉口時雄助教授等の三十稻場遺跡の発掘調査が行なわれた。

最近では、北陸地建による国道八号線関原バイパスの初期計画線上に二つの遺跡の南端が該当して、昭和四三年八月（六日間）、長岡市教育委員会の主催で（調査担当者、筆者）、糠山すその南三十稻場の、

旧浜道附近の畠地、一七七一 m^2 の面積にわたる発掘調査がなされて、多くの遺構と遺物が確認された。

(附図参照) (註2)

またこれよりさき昭和四〇年四月に、内外の知識人をはじめ、地元関原町民の二遺跡に対する保存運動がさかんとなり、馬高・三十稻場遺跡の保存会が設立され、在京の同町出身者もそれらに合流し、自主的な寄金行為によつて、火焰土器出土地の第七号地点の約五〇〇〇 m^2 の畠地が、土地所有者の理解によつて買収が行なわれ、後日、長岡市に寄附されて今日に至り、この地点はつづいて、昭和四四年一二月新潟県史跡文化財指定地にされている。

その後、建設省及び日本道路公團による国道八号線関原バイパス路線計画が、馬高遺跡の北辺を通過する計画変更(現行路線)があつて、そのため長岡市教育委員会は昭和四五年一〇月、計画線上の約三、六〇〇 m^2 の地域(旧高木農園)にわたる予備処理の発掘調査(調査担当者、筆者)(註3)を施行した。

さらに、昭和四六年の秋には、関原を中心とした県営畠地総合土地改良事業が推進され、連絡の不十分から畠地の整理造成や、道路工事などで、馬高遺跡の中央及び南側、あるいは北側地域において、かなりの面積にわたる埋蔵文化財包含地の破壊が行なわれた。(後述1、石組み炉址、二六基が煙滅した。)

これらのことから、この広大な二遺跡の実体把握と、将来に対するその保全対策樹立のために、長岡市教育委員会の今次緊急調査の計画がなされ、幸いにも強力なる国及び県の温かい助成を得て、基礎調査の実施となつた。

- (1) 中村孝三郎『馬高』長岡科学博物館研究調査報告 第二冊 昭三三・一〇
- (2) 中村孝三郎『三十稻場遺跡調査略報告書』長岡市教育委員会刊 昭四五・三
- (3) 中村孝三郎『馬高遺跡北辺地点の発掘調査報告書』長岡市教育委員会刊 昭四五・一二月

□ 遺跡と周辺の地形

信越国境をなす一、〇〇〇m級の関田山脈は、鉛色の日本海に向けて大きくはり出し、東頸城の多くの山襞の中に、西走、あるいは北流する保倉川、鰐石川、渋海川などの渓谷河川をかかえてしだいに高度を下げ、その東行山嶺支脈は信濃川に沿つて、魚沼傾動地塊を構造し、また天水や、野野見峠から北に傾斜してくる中央部においては、数分嶺が北へ——北へと延びて、黒姫（八九〇m）や、八石山（五一四m）などの主嶺を点々と形成させている。

八石山の東側の分脈・低地墨はさらに高度を下げて、低い起伏のうねりをみせながら、北に、東にと延び、その一支脈は信越線の北側において、標高三〇〇mの樹形城址を主軸に長岡市の大積・宮本の諸集落の南背に迫りながらさらに東方に漸行していく、高頭集落の南方にある片刈城址や、さらに赤坂山から黒川の支流の谷川をこえて東に延びるころは、しだいに地勢は一〇〇m前後の低い関原丘陵地帯を形成し、その最北端は独立丘陵性の糠山の松林となつて、この低分嶺地塊は終了している。

糠山は、標高一〇四mの小丘陵であるが、その裾は北に向つて高原的な地形をつくりながら強くはりだし、その先方周縁は、西は道山山脈の鷹の巣・曾地峠などを水源とした黒川の細長い帯状沖積地。また東は信濃川の造成した広大な中越平野。この二つの沖積平野の接合点に向けて、舌状に突出した台地は、東西一、七〇〇m、南し北二六〇〇mのなだらかなカマボコ状の関原丘陵となつていて。

また、関原台地と糠山の接続点附近は標高七〇mをしめし、信濃川との比高は三五mで、このあたりの地層は越後魚沼層土を基盤とし、その上に厚い第四紀の矢代田層の赤色洪積土（ローム）が堆積し、さらにはその上面は有機腐植物をふくむ黒色の表土によつておおわれた、広大な平坦性の畑となつていて、煙草・そ葉がつくられている。

北面が大きくひらけた糠山の裾は、関原の市街地から約八〇〇m離れ、その中央に、南から北に向かって

断層性の幅五〇m前後の浅い入谷が構造されて、細い帯状の水田地帯となつてゐる。この水田の東側が馬高遺跡で、また西側が三十稻場遺跡である。この二つの遺跡はともに東へ西一五〇m、南へ北二五〇mの地域にわたつて、今も濃厚な遺物の地表散布がみられ、新潟県における最大の繩文中期から後期にわたる古代集落址である。

調査

- ◇ 主催者 長岡市教育委員会
- ◇ 調査期日 五月一日から九月三一日まで
- ◇ 組織
 - 調査団長 関口庄作（長岡市教育委員会長）
 - 調査副団長 中川信一（長岡市教育長）
 - 主任調査員 中村孝三郎（日本考古学協会員）
 - 調査員 竹田祐司・神林昭一・若松茂・多多静治・金子拓男・中島栄一・松井寛・金子正典・小山増栄（以上越後古代研究会員）
 - 調査補助員 山田千代松・小林正一・山田喜代司・松本良眞・堀滋・島宗寅一（以上馬高・三十稻場遺跡保存会）・外川久四郎・本間英彦（以上関原土地改良区組合）
 - 事務局長 山沢弘（社会教育課長） 同主任・西岡富雄

昨今、日本の各地で、急増してきた国土開発の土木工事や、大がかりの宅地造成などの進行によつて、多くの著名遺跡や、旧跡の破壊が公然と行なわれ、わが国の文化水準の低さと、その無策ぶりが痛感させ

られるところであつた。殊に埋蔵文化財の遺跡対策としては、「発掘処理」を前提とする調査概念が大きく作用しているが、年々しだいに煙滅し、稀少数のものとなりつつある先史時代の遺跡の永遠性に思いを至すとき、たとえ如何なる名目がつけられようとも、また著名の大大学者が学術担当者になつたとしても、「発掘」行為はやはり遺跡の破壊が本質をなすもので、ひとたび破壊された遺跡は、「再びもともどらない」ものであり、また遺跡は無限に存在するものではないのであって、今日の文明が保有する最高の学術力をつくしても、その包含層土の十分の分析や、古代の決定や、その他遺跡、遺物のすべてにわたる解明は期しがたく、無限に飛躍してゆく将来の人智と、その学術知識に待つことがきわめて多く、さらに今日その正確性をほこりうるものも、未来において幾多の誤びようが指摘されることが予知されるのである。それが学問の道と、遺跡の無限的な永遠性というものであろう。

しかば、遺跡を現在の状態のまま、しかも無傷のまま「永久保存」するということを前提として、先史廃墟のその遺物の分布性や、規模の実体把握を目的とした調査方法には、今日如何なる技術手段があるというのであろうか。殊に広大な縄文文化の遺存跡においては、残念ながら「確信」のもてる適用方法は確認されていないのが現状である。

私は今日まで、研究目的のために、新潟県下の先史時代遺跡を大略一〇〇余箇所の発掘処理してきたが、人知れぬ予備調査において、はじめは地形の観察、表面採集、給水源の所在などを集約することによつて発掘を遂行してきたが、時々、それらの方法による欠点から失敗と苦汁をなめた多くの体験を味わつてきた。しかししだいに強い労力を必要とするが、根気を尽すボーリング検索をその予備調査の主体とするようになった。

ボーリング検索は、狭少な面積に対しても安易なものであるが、広い面積の遺跡や、殊に先土器文化の遺物をふくむ包含層の把握については、ボーリングを深く――しかも堅いローム層土の中への挿入はき

わめて困難な作業であり、また八〇cmをこえる深度操業の連続などについても、引き抜くときの腕、肘、あるいは肩や腰にくるボーリング検索棒の、土の吸着性の抵抗は、意外なほど強力なものがあつて、二～三時間も連続作業すると、無意識のうちにいつか上半身がシャツをぬぎすぎて、流汗の裸体となつていてるのが常であつたし、はじめに使用した鉄製の棒や、土壤検定用のものなども使用したが、既製の用具は土に刺さりが悪く効率がよくないので、土の吸着抵抗を弱めるために、太さ一・二cm、長さ一m余、そして尖端はきわめて細く、鋭く尖出させた硬質のステンレス製の強甚な着柄物を越後古代研究会副会長の神林昭一氏に製作してもらつて、當時携帯使用するようになつてからは、遺跡中心部の索摘はほとんど一〇〇%の発掘効果をあげてきた。

ボーリング検索法は、目新しいものではなく、我々の先人が古くから使用してきたものであつたが、近頃は発掘の際のきわめて狭い部分に利用される場合が多い傾向にあつた。このような端的に金属棒を地中に刺しこんで、目に見えないものを暗中模索するという原始的で幼稚な調査技術も、土器、石器などの遺物の識別や、ピット、あるいは炉址、石組遺構などの検索判定が充分に熟練するには、やはり永い時間の体験が必要なのである。またそれらはボーリング器具の先端を、きわめて細くし、鋭く尖らせるこことよつて、触角はさらに鋭敏となり、しかも小さな音響をすらともなうことを探るのであつて、五m～一〇mかなり遠く離れていても、耳をすましていると、かすかな音響ながらも検索結果を把握できるのである。

以上のボーリング検索のことは、ありふれたことかも知れない。また案外知らない発掘関係者も多いようである。そして『中村の聴診器』と俗評されているボーリング検索を基準にして、日本の（埋蔵文化財）繩文集落址の調査で、組織的に試みたということを聞かない初例的な、広大な遺跡全面への適用を自信をもつて計画にかかつた。

しかし、馬高・三十稻場遺跡は、八万～九万²m²にわたる地域に、遺物の散布が知られている集落址であ

つて、この広大な土地に挑む初心者を中心とした限りない人力の展開、そして大地にむけていつ果てるとも知れないような作業、一人一人が、足下に横点列、あるいは波状点列を描きながら、一寸刻みに、二〇cm×三〇cmの間隔をもって前進する刺突作業——、それは何十万回、あるいは数百万回に達する間断のない地中探索の、金属棒の刺しこみという、根気と汗の連続作業がくりかえされることであろう。またそのためには恐らく春から夏、さらに秋へと長い期間にわたる、波状的な人海作戦による人力の集中——を必然のものとしなければならないのであろう。だが初心者も回を重ねる毎にいつか熟練者となり、やがて最終的には必ずや多くの集積された力が、貴重な遺跡全域の資料となつて帰納されてくることを確信していた。

このような計画のもとに、五月七日から苗床から移植されたばかりの煙草畑の、馬高遺跡の南隅から少人数による第一次調査を開始した。

ボーリングの検索は、「ボーリング十年」といわれるほどの熟練を必要とし、最も心配される点は、その熟練度にかかっていたが、この関原丘陵地帯を構造する第四紀の「陣が峰」「矢代田層」系の地山層土が、きわめて微細粒なローム層で成立していて幸いなことは、自然の石礫包含が稀有の現象をしめしていたことであつた。

また、さらにもう一つの現象は、遺構及び遺物の包含層が二〇×八〇cmの浅い地点にあつたことである。これらの条件は初心者でも石臼炉址の発見を容易にさせ、さらに土器散布の検索も作業員諸氏の熱心な努力によって巧に知識されていった。そして調査は長岡市教育委員会の社会教育課及び中央公民館を中心となり、越後古代研究会員、教育委員会所属の総務課・学校教育課・科学博物館・互尊文庫・青少年文化センター、地元の馬高・三十稻場遺跡保存会員など多くの参加諸賢のチーム・ワークと、流汗の尊い自覚意識によつて、一日降り続く梅雨の日、荒天雷鳴の日、また風速一八mの風の日、あるいは炎天の日に、ま

た畑の作物関係から秋風の中の検索の日々がつづいて、作業の終了したのはみぞれの降りつづく十二月三日であった。

また昨年の昭和四六年の秋からはじめられた新潟県営関原地区の畑地帯総合土地改良事業による、馬高・三十稻場遺跡地帯に、十一月二三日、ブルトーザー数台の侵入があり、遺跡地の破壊がはじめられた。そのため長岡市教育委員会・馬高保存会などによつて、工事関係者に対する工事の即時中止の要請がなされ、新潟県教育委員会、新潟県長岡農地事務所、関原農地改良組合、馬高保存会、長岡市教育委員会などの代表出席者による十数回の協議会が開かれて、遺跡地保存のための数件の農道計画の変更が協議されたが、「土地の所有権」という暗礁に乗り上げたり、幾度か激しい攻防論議がかわされ、急速の進展はみられなかつた。しかし協議は難行しながらもすすめられてゆき、その結果、馬高地域におけるA・Bの二地点に小規模の処理的な発掘を行つたほか、また三十稻場遺跡南端の貫通農道敷地のA地点や、同三十稻場の水田関係の農道を、崖下通過に計画変更するために、B・C地点において、小面積の整理発掘調査を行なつた。

以上が、今次調査事項の概略であるが、馬高・三十稻場遺跡もこのような経過をたどつて、諸関係事業所をはじめ、多くの調査参加の諸氏の理解と温い協力により、遺跡の基礎資料もまとめられて、今後最大限の遺跡保存が計られることになつた。

次に、遺跡の検索、あるいは発掘についての調査概要を記したい。

檢

索

編

調査は、四月一日から一週間以上にわたる三沢教諭の引率する、長岡農業高校生のクラブ活動の測量部によつて、広大な遺跡地帯の測量がすすめられ、遺跡の実測図が作製された。測量については、はじめはボーリングによる検索調査と並行して行う予定であつたが、煙草や、そ菜の生長が、やがては測量作業を妨害することなどが考慮されて、その終了を急いだためである。またボーリング検索は、その日その日の対象地域に対しても、長さ二mのボールで、五m×五m、二十五m²の小区画を設定しながら、一列横隊の作業をすすめる計画で、そのためには先に測量図が作成されていることが、最適の方法と考えられるのであつた。

遺跡全域のボーリングによる地中の検索は、さきに記したような諸基本を調査主体として、五月七日午前九時から、馬高の第九号地点の西面する崖に東側から抉りこまれた小さな入谷附近の畠地一。第一一条から二四条にわたる地域に、越後古代研究会の松井寛・金子正典君や、長岡市教育委員会の馬高・三十稻場調査事務主任の西岡富雄・長田不二夫・相田祝司君などの若い諸君と、ボールをたてて地区を設定しながら、一列横隊となり、大地にむけて一寸刻みの検索作業を開始した。

このあたりの畠は、農家の温床から移植されてまもない煙草が、一面に植えられていたが、苗木の高さは一五cm前後で、葉もまだ小さかった。この日は高原的な遺跡台地は、日輪が輝き、さえぎるものもなく空は青く澄み、東山山脈が美しく展望されたが、もうヒバリの声は聞えなかつた。

この日は、集団の作業能率に主点がおかれたほか、いくつかの試験性をふくむ用器具の操作などのために、かなりのビッチをあげた作業となつた。そして最も重要な遺物包含層の濃し疎に対する四等級の判定の分類基準についてや、ロームまでの深度などの野帖記入に対する打ち合わせを入念に協議した。

そして長さ二m前後のいくつかの馬高式の配石炉址や、点々とした大し小のビットなどの所在を体験して作業を終了したが、このような調査方法が、予想外の難事業であり、さらに広大な遺跡面積の消化というものが容易でないことを知り、調査の前途の遠きを思つた。(以下、検索経過の要点をしるす。)

検索調査経過

(附図二一参考)

◎ 昭和四七年四月一日～一六日

参加人員 延一二八名

長岡農業高校・測量部生徒による馬高・三十稻場遺跡の測量図が作成された。

△ 馬 高

(1) 五月七日 (日) 晴

参加人員

一〇名

農地改良工事の昨秋からの残留地帯であった馬高第九号地点の、狭い入谷附近の雑木林の崖地帯の開地と、谷埋め工事に関する協議が成立し、緊急にこの附近の調査をすすめることになつたために、第九号地点の第一条（ $5m \times 5m$ 区画を区とよび、またその縦の連続を条とよぶ）から第二四条にわたる地域のボーリング検索をはじめた。附図二参照（以下層土の浅、深及び遺物包含の詳細は記載を本文では省略）

入谷北側の煙草畠中の第一二条の三区において、かなりの遺物の包含層の潜在を確認し、また繩文中期の馬高式の長方形を呈する大形の石組炉址と、その周辺に数点の大・小のビットを発見。つづいて入谷の南側の崖に沿つた雑木林中に設定した一七条の8・9区にかけて、潛在する二基の小形配石炉址を確認したが、その形は方形的で、馬高形式に属しないものと推定され、多分に三十稻場式時代のものと考えられた。（本日の炉址確認、三基）

（この雑木林中の二基の炉址は、均土工事地帯に属するために、後日の五月一四日と、二一日の二日間で発掘調査したが、やはり三十稻場式の一方に掃出口のつくられた繩文中期終末から、繩文後期の最初期の短期間に出現する炉址形体をしめていて、三十稻場式の刺突文などの土器が伴出された。これは昭和初期の

『近藤発掘』以来はじめての馬高における正式発掘調査であり、『馬高地域には繩文中期の住居址が主体をなす』という、永い間の既定的な概念を破るものであつて、馬高・三十稻場の二遺跡は、中央の長い水田谷を境界にして、中期と後期という判然とした時代区分をもつた『集落移動』の標本地のようにみられてきたが、水田谷をめぐって、そこには判然とした消滅関係の時代的区分はなく、当時は二つの遺跡地域が全面的に利用されるという、漸移的な発展移動経緯の複雑な入組み住居の設営が、片面ながら看取されるのであって、これはまた同時に、三十稻場遺跡においても、繩文中期時代の生活痕跡が混入して遺存しうる注目の事象とみなされる点であつた。それはやがて後述する三十稻場の農道変更によって行われた三十稻場B地点の整理発掘によつて、最下層から繩文中期末の大系の土器（図版二六一）が、鮮やかに検出されたことともに見逃しがたい現象であつた。このような事柄は、我々が馬高・三十稻場といふ二つの異つた近世の行政区画の中から生じた、地点別の二つ遺跡として呼称してきたものが、本質的には分離されえない一元的な持続の中に生育されていたことを知らされるのであつたし、また今日にして、ようやくそのような注目事項の把握されたことは、第一は遺跡の広大さと、昭和初期の近藤発掘以来永い間にわたつて、馬高遺跡に対する発掘調査が充分に行われていなかつたことが原因とみられるのであろう。）

(2) 五月一四日 (日) 曇時々小雨

参加人員 二〇名

今日は朝八時、長岡市役所関原出張所に集合して、馬高・三十稻場遺跡調査の種々の打ち合わせをなし、それより遺跡現地に行く、そして馬高第九号地点の雜林中の先日確認した二基の炉址を中心としたA地点の発掘班と、ボーリング検索の二班に分れて作業についた。（A地点の発掘については、発掘編参照）
検索班は、山沢社会教育課長を中心に、先日にひきつづき、全面煙草畑の遺跡の外郭部とみなされる第九

号地点の第二五条から、三六条にわたる地域の検索を行なつた。二五条の2区から3区にかけて、若干崩れが推定される二基の石囲炉址を確認。また第三〇条の4区においても、一基の炉址の潜在を発見した。

本日の検索対象地点は、すでに昨秋土地改良のブルトーラーが軽く均土した地域で、かなりの遺構、遺物が破壊された地点であつたが、北側にかなりの遺物の残存包含層の分布が知られた。（本日の確認炉址三基）

(3) 五月二一日（日） 強風時々小雨

参加人員 二二名

昨日からの寒冷気温は、今日もひきつづいて五月下旬といふのに一四度をしめし、風速一六m／一八mの強風が、冷雨を横なぐりに叩きつけてくる。

今日も二班に分れ、発掘班は先日にひきつづいて、馬高の第九号地点の第七条～9区の雑木を伐り、抜根したりして、第一次検索で確認していたA地点第二号炉址を中心に発掘作業をすすめた。（発掘編一馬高A地点一参照）

またボーリング検索班は、馬高遺跡の南東地点の第一〇号地域の検索をつづけ 第一三条の2・3・6区において、三基の炉址を確認し、また隣接する一四条～5区で一基、さらに第一五条の4区において一基の配石炉を発見したがこの4区の炉址は、ボーリングの密刺によつて、拳大の石礫を二重縁に配列した典型的な馬高式の炉形をなすことが知られた。）

第一〇号地点は、北側の一〇～一七条にわたる地域に、かなりの遺物層の堆積残存が確認されたが、南側の第一九条～二九条にわたっては、すでにブルトーラーによる地均しが終了していた地点で、土器類の包含はきわめて稀薄であった。（本日の炉址確認、五基）

(4) 五月二七日 (土)

曇時々雨

(5) 五月二八日 (日)

雨

参加人員 一四二名

この二日間は、南三十稻場の糠山のすそを南し北に貫く大形農道計画の敷地に対し、整理発掘をすすめた。(発掘編一三十稻場 A 地点発掘 I 参照)

(6) 六月一一日 (日)

晴

参加人員 一九名

一班は馬高遺跡の市有地域の第七号地点、五、〇〇〇²m²のすすき原を、調査進行のために草刈機及び大鎌によつて整表作業し、他の一班は、第九号地点の北側の残部、第一条から一〇条までの地域を検索をしたが、晴天つづきのために、土が乾燥して堅くひきしまつて、ボーリングの突き刺し、殊に引き抜くときの固着性が強く、作業は難渋した。

第二条の3・4区、六条の4・7区のジャガイモ畑において、それだれ一基づつの石囲炉址を発見したが、それらの炉址は地表土が浅く、若干の炉形の崩れが推考された。また七条・5区、9条の3・5区においても各一基づつの炉址が確認された。(本日の確認炉址、七基)

(7) 六月一八日 (日) 小雨後曇り

参加人員 一五名

今日の参加者には、ボーリング使用の体験者も多いので、馬高遺跡の中心部、第八号地点の第一条から九

条までの地域検索にかかった。(この地区は、昨年秋、南側に農道が新設されたときに、道路敷地で四基以上の大炉址と、多くの遺物が破壊された地点であった。)

この第八号地点は、ロームまでの深さは約三〇cm前後の浅層地帯であつたが、かなり多くのビットや遺物の潜在が判明した。また石組み炉址は、第一条・7区、第三条・1・3・6区、七条・6区、八条・6区(二基)、同8・9区、九条・9区で各一基づつその所在が検索された。また午後になつて、さらに東側の第六号地点の煙草畑に設定した第四条、五条、六条の地点を東方へ五〇m、各条とも〇区づつ検索をしたが、このあたりは、遺物はやや稀薄をしめし、若干のビットが確認されたが、炉址の検索はできなかつた。

(本日の確認炉址 一〇基)

(8) 六月二〇日 (火) 曇

参加人員 一二名

今日まで調査員を主体に毎週日曜日七回にわたりボーリング検索作業を実施したが、このペースでは広大な遺跡を調査期限まで消化できないこと、また終日にわたる連続した地中への突き刺し作業は、腕と腰に、強い力の比重がかかり、朝九時から夕方五時前後までの長時間にわたる作業は、疲労がつよく、午前中はかなり鋭敏な感覚反応の中に作業がすすめられるが、午後はきわめて感覚の鈍化がいちじるしく、正確度の低下がみられるために、調査事務主任の西岡君などと協議の結果、中川教育長の好意を得て、教育委員会事務局職員の総動員計画が成立、今日から短時間の『平日半日作業』に、試験的な転換をすることになった。

本日の検索は、一二、五〇〇m²の広大な第六号地点にかかつたが、午後一時からの半日作業のために、六号地点の第七・八・九・一〇・一一条までの、各1区から10区までの分割地点を対象に作業をすすめた。

この地点は、处处に深さ一mに達するビットが確認され、かなり多くの遺物の所在が判明。また炉址は、

第八条・1区、九条・2・8区、一〇条・4区、一一条・5区などで、各一基づつの配石炉址の所在が知られた。(本日の確認炉址、五基)

(夕方、社会教育課の西岡富雄・渡辺藤次郎・相田祝司君や、馬高保存会の小林正一・山田喜代司の諸氏によつて、遺跡の北側を通る国道8号線バイパス脇に、高さ四・五mの馬高・三十稻場遺跡の標識板が立たれた。)

(9) 六月二二日 (木) 雨後雲

参加人員 一三名

(今日も半日作業で、午後一時集合)

めつきり葉が大きくなつた煙草で埋められた馬高の中心部、遺跡を南・北に横切つてゐる細い農道の、東側に沿つて設定した第六号地点の第一二・一三・一四・一五・一六・一七・一八・一九・二〇・二一・二二・二三・二四・二五条を、東方へ向けて二五m、各条とも1区から5区までの分割地域の検索にかかつた。

この地点は、ロームまで三〇・四〇cm前後の上層土の堆積がみられ、南側の第一二・一三・一四条地点には、かなりの遺物の密集が知られたが、北に(二五条)ゆくにしたがつて、遺物の所在は稀薄となつていた。そして、第一二条・5区、一三条・4区、一五条・2区、一八条・4区において、各一基づつの炉址が検適された。(本日の確認炉址、四基)

(10) 六月二五日 (日) 晴

参加人員 一二名

(今日は一日作業)

さきの二二一日、第九次検索地東方の、馬高第六号地点の煙草畑に設定した第一六・一七・一八・一九・二〇・二一・二二・二三・二四・二五条の東側残部の各5区から20区に至る遺物の密集地点とみられる広い地域を、越後古代研究会員を中心とした検索班によつて、ビツチをあげた調査をすすめ、第一六条し7区、二二条し7・8区、二四条し6区において、計八基の炉址を確認した。

また馬高遺跡の東し北隅に設置された新農道と、細い旧農道に挟まれた三角地帯のそ菜畑の第五号地点の検調をなしたが、南側の第六号地点から伸びてきた遺物の包含層地帯は、新設農道をこえて第五号地点に達及していることが把握された。（この農道の新設工事のときにも、冬期間かなりの遺物破壊があつたといふ）この小面積の遺跡外郭地帯の第五条し1区で二基、第六条し1区において二基、同2区においても二基、計六基の重複した密集性の炉址の潜在が推定された。（本日確認炉址、一四基）

(11) 六月二七日 (水) 雨

参加人員

一一名

(本日は半日作業)

今日も朝から休みなく煙草畑に降りそぞぐ緑色の雨は、終日やみそうもなかつた。一雨、一雨毎に煙草の茎が伸びて、高さも一尺をはるかにこえる畠が、処々にみられ、煙草と煙草の間の畦畔は、両方からひろがる葉の茂みで、その間を検索班往来することは、育ち盛りの煙草の葉の欠折や、倒木を生じさせたりして、耕作者のもつとも嫌う点であり、また日中だけに生ずる現象の煙草の『脂』が、顔や手足、あるいは衣類に附着すると、黒ずんだり、ベトベトする嫌な気分は耐えがたいものがあつた。さらに雨の日は、雨具の下まで、大きな葉のしづくが浸透したりして、煙草畑の中の集団検索はしだいに困難となつてきただ。

これはまた連続、連地検索の予定計画を大きく狂わせて、非能率性を露呈させるのであつた。やむなく飛

地、飛地の普通の野菜畑などから調査をすすめ、煙草の葉が黄色く色づく『摘葉期』まで、現地第一主義で、辛棒づよく待つて調査をすすめるより他に方策がなかつたし、そしてその後、馬高・三十稻場の遺跡地帯が、高さ二mに達した緑色の、広大な『煙草の海』を眺めているような、初夏の日々がつづいてゆくのであつた。

今日は、降雨のために煙草畑を敬遠して第六号地点の南側の農道に沿つた検索残点の、第一条、二条、三条の区域を、東方へ一〇〇m延長した20区までの、細長い地点をボーリング検索した。

第一、二、三条とも、西側の第10区辺までは、若干の遺物の潜在が判明したが、東に行くにしたがつて、遺物は飛散性の稀薄をしめしていく。(本日の炉址確認は、○基)

(12) 六月三〇日 (金) 雷雨

④ 参加人員

一一名

(テスト的な半日作業方法も適切なことが判明したが、煙草畑の件や、天候、また広い遺跡地域に対しても、予想外に調査が難行遅延していることや、現地への人員輸送の件などが、調査事務局の西岡君などと検討されて、やむなく本日より現地で人員の順次交替制を考慮して、また一日作業に変更した。)

今日から馬高の北側外郭部に設定した、第三号地点の検索調査にかかる。この附近は、昭和の初期、六年間にわたり近藤篤三郎氏の発掘地点に該当する地處であるが、馬高中央農道から西に傾斜する煙草の畑に、第一条及び第二条を設定して作業にかかつたが、降雨はしだいに激しくなり、遠雷をともなつできた。広い平坦の畑中で、金属製のボーリング器具を持つての作業は、万一『落雷』の危険性も考えられた。十一時をすぎるころからさらに雨は激しさを増して、豪雨性のものとなつた。またしだいに強い雷鳴は閃光とともに頭上に迫つてきたので、作業を打ち切り、一同は馬高中央の杉林中に逃げこんだ。この頃、長岡市教育委員会より、大形シートや、多くの雨具を持参した中央公民館職員の佐藤ミイ子君の乗つた救援車が来てくれた。

午後一時を過ぎると雨もやみ、午前調査をはじめた煙草畑はぬれて入れぬので、隣接した第四号地点の馬鈴薯の畑に設けた長さ九五mの第七条、第八条地点の検索にかかった。

この地点は、西方の水田地帯に向けて、傾斜する頂点部に位置するため、表土層は浅かつたが、おびただしい遺物の包含と、大と小のピットなどが識別され、完欠した石廻炉址も第七条において、6・8・18の各区で一基づつ確認され、さらに第八条においては、6・9・11・15区にそれぞれ一基づつの炉址が検索された。(本日確認炉址 七基)

(13) 七月二日 (日) 小雨後晴

参加人員 一六名

西に向ってゆるく傾斜した畑地に、煙草や、野菜などが耕作された第三号地点を、西向する第一条から第五条までのかなり広い地域の検索にかかったが、先日調査した第四号地点の第七・八条地区に隣接する第一・二・三・四・五条の南側地帯は、かなり原層土の残存性が確認され、土器などをふくむ遺物密集層が点々と知られた。そして第一条の13・14区、第二条の4区、第三条の7・8区、第四条の8区などで各一基づつの炉址が検索されたが、それらのうちには、炉形の若干崩れを推定されるものがふくまれていた。

この第三号地点は、かつての『近藤発掘』された当時は、一面の桑畑地帯であった。そのためか、第五条から一五条にわたる地点では、処々に既発掘溝址とみられるやや軟質性の層土で覆われた大形の凹痕箇所が点々と識別され、遺物の潜在反応は稀であった。

(この第三号地点の第一条から第五条地帯の東側は、昨年秋から今春にかけての農道新設のとき、道床地點から五基の密集した配石炉址の破壊があつたといふ。)

また、午後から、国道8号バイパスに接し、水田にのぞむ三角低地の、第一号地点の検索調査にかかった

が、この地点も、初期の『近藤発掘』に属し、また昨秋から今春にかけて、農地の均土された地帯で、遺跡の煙滅性が看取されるのであつた。区別設定した第一条から一一条にわたる全地域は、遺物の包含性はきわめて稀薄であつた。

さらに夕方ちかくなつて、東側の遺跡外郭部にあたる小面積の第二号地点に、東方にむけて第一条から第二条に至る地区を設け、西瓜、なすなどの野菜畑の検索を行なつたが、この地域は傾斜性の流土地帯で、ロームまでの表層土は浅く、索点遺物もすくなく、第九条2区で一基の残存炉址が検索されただけであつた。
(本日の確認炉址、七基)

(14) 七月四日 (火) 晴

参加人員 一二名

馬高遺跡の中央部に設けた第四号地点の、長さ九五m、第一条から第八条地区までの調査を行なう。

第一・二条とも、かなりの土器類の包含が検索され、第二条9区で二基の炉址の処在が検索され、第二条9区で二基の炉址の処在が認められた。

また第三・四条附近は、昨秋一一月二二日、土地改良工事のブルトーラー及び、ショベル・カーが、樹木の根株や、芒根などの障害物を埋めるために、深い大形の処理溝孔をつくりはじめ、馬高遺跡の中心部を形成する重要保存地帯であるために、遺跡保存関係者側から即時工事の中止を要請された地点で、破壊された炉址は九基と推定されている。

第四条から、八条にわたる地域は、遺物の濃厚な密集性が検索反応され、いくつかのビットなどの処在も確認された。また第六条の西端に位置する19区、第七条の6・8・18区、第八条の6・9・11・15区で、それぞれ一基づつの配石炉址が記録された。
(本日の確認炉址 一〇基)

七月一〇日 (月)

終日入梅性の小雨

参加人員 一三名

今日から待望久しかつた馬高の中心部（保護柵内）の第七号地点の検索にかかつたが、この地点は昭和四〇年、馬高保存会有志が町民などに呼びかけて、資金を集め、土地買収を行ない、後日長岡市に寄贈した地域であつて、当時、買収地選定の相談をうけ、近藤篤三郎氏の発掘した『火焔土器とA式一号』の出土地点でもあり、また多くの遺物埋蔵が推定されることから、この七号地点の買収を極力すすめたのであつた。そのようなことから、この地域の地底に残存する遺物埋蔵の『濃く疎』についての検索結果は、責任と深い関心のもたれるものであつた。

この第七号地点は、芒や雑草が丈高く繁茂していたが、先日の草刈班の除草作業によつて、地表はよく整理されていて、設区作業も順調にすすめられ、西方へ一二〇m中の五〇m、第10区まで、また南からの第一条から六条までの方形を呈した分割地点を調査対象としたが、馬高を南し北に通る中央農道に沿つた東側の地区は、各区とも遺物は若干稀薄であつた。しかし各区とも4区附近から濃密な遺物包含が知られ、それより中央地域にかけて、土器片、ビット、炉址、また疑似的な礫石の集積地点などをふくむ厚い遺物層の潜在が捕足された。

またここでも、疑似的な崩れ炉址、あるいは何箇所かの石礫集点に対しても、スコツプによる小さな『覗き窓』が穿孔されて、その確認識別がなされたが、このようなことは検索に熟達すれば不必要なことである。しかしあはじめには参加した初心者に対して、時々、小さな穿孔をすすめたりもしてきたが、そのためには集団の作業能率の低下があり、疑地点に対しては熟練者の一寸刻みの集中検索を行なわせ、一〇〇%の確実性を求めてきた。このようにボーリング検索は直接感触の上に、強力に成立するものであるが、その弱点は、小

さな砂石の混合する地層点の土器片の処在把握は、微妙な反応性にあって識別がきわめて困難であることと、無配石焼土の平炉址に対しても硬く軟の充分なものが容易に求め難いことである。

第七号地点の本日の調査地域からは、第一条4区、第二条6区、第四条7区などで、馬高式の配石炉址が確認された。（本日の炉址確認 四基）

(16) 七月一二日（水） 終日小雨

参加人員 一三名

前の一五次調査にひきつづき、馬高保護柵内の第七号地点の分割残地帯の、第七条から第一〇条までの、長さ五〇m、各10区までのボーリング検索を行なう。

馬高中央農道に沿つた東側は、やはりやや稀薄な遺物反応で終り、各条とも7・8・9・10区の七号地点の中央辺に至つて、土器、礫石、ビットなどをふくむきわめて濃密な遺物層が確認され、それとともに、第九条の9・10区において一基づつの炉址の処在が判明した。

午後になつて、七号地点の西半部の、第一・二・三・四条の第11区以西の水田にのぞむ、雜木林の崖地に對して調査をすすめた。しかしこの細長い西半部の分割調査、過去の『近藤発掘』された古戦場ともいえる地点の南端部で、遺物の包含はきわめて稀薄散在であつた。

第一条の16区で、崩れ炉址が確認され、またさらに火焰土器A式一号が発掘された第四条の14区地点でも、予想しなかつた残存一基の炉址が検索されて、注目されるものがあつた。（本日確認炉址 四基）

まだ西側『近藤発掘』されたかなりの広さの、未調査地域を残しているが、第一五次調査と、本日の調査によつて、第七号地点の概略中心部の検索は終つた。そして予想されたように中央の平坦部で、南から北に、やや斜めに延びた集落性の密集した遺物包含地帯の流れ方向がよく確認され、そこにはかゝつての広場や、道

路などの処在位置が推定されるのであつた。また第七号地点が、保存会諸氏の努力でスキ原の姿で保護されていたために、地層は厚く、他の地点に比較して地表土の雨水流失は認められず、きわめて好条件下につたことは、今後の遺跡保存に対する参考点が多かつた。

(17) 七月一三日（木） 曇り時々小雨

参加人員
一七名

今日は、馬高の第七号地点の柵内の残り分割地域の、第五・六・七・八・九・一〇条の第一一区から西側の草刈り班によつて刈り取られて整地された芒原と、杉や雜木の茂る崖上の雜林地帯にかけて検索作業をすすめた。しかし今日の調査対象地域も、昭和初期の『近藤発掘』の既掘地帯に属じていて、かなりの面積にわたる遺物を包含していた原層土の攪乱、あるいは煙滅が予想される地域であつた。

検索は予期されたように、遺物は西にゆくにしたがつて稀薄な潜在をしめし、西の崖附近はほとんど無遺物地帯となつてゐた。

また夕方、最後に残されていた杉林中に、器用な渡辺藤次郎君（中高職員）の努力によつてつくられた『馬高休憩所』の、丸太を組んだ長い腰掛けの下から、疑似集石地点が検索されて、小さな『覗き孔』と呼ばれる確認発掘孔の中から、馬高末期の所産とみられる小形の火焰形土器の大形破片が出土した。これはこの七号地点の一角における小さなできごとであつたが、この地点に潜在する多量の遺物の本質的なものに触れたような気分にさせられるのであつた。

遺物の少ない西側地点であったが、第五条の13区、六条の11・12区、第一〇条の11区からそれぞれ一基づつの石囲みの炉址が確認された。（本日の確認炉址、四基）

馬高では、第六号地点の東側一帯の外郭地点の、背の高くなつた青々とした煙草畑の地域が、未検索地点

として残されているが、この地域は下葉の摘葉期まで待つことにした。

(午前一一時ちかく、長岡市議会文教社会委員会の市会議員の諸賢及び教育委員会の山崎総務課長などが、小雨の馬高で、現地観察して帰られた。)

△三十稻場

(18) 七月一四日 (金)

曇り時々小雨

参加人員

一七名

今日から、馬高と水田をへだてた西側の三十稻場遺跡の検索調査にかかった。また別班は三十稻場の第二号地点の広い芒原の、草刈りを開始した。

調査は、南三十稻場と呼ばれている遺跡の南端地帯で、糠山裾の北に向けてゆるく傾斜する地域を、東西に横切って新設された幹線農道の南側に設定した第四号地点に、東方から第一条と四八条に至る条区を設け、その中の野菜畠である東側の第九条から、一三条の地域にわたって検索作業をはじめた。しかしこの広い第四号地点は、終戦直後、ブルトーラーによつて松林が開墾され、その当時、点々と土器群が露呈、破壊されたといふ地域であるが、均平整地されたその後の耕地に、遺物の包含地帯の残存は期待されない区域であった。

長岡市教委の山崎総務課長をリーダーとする今日の調査班が、熱心に検索をくりかえしたが、やはりこの地点からの残存炉址の発見はできなかつた。

午後も雨雲が低く垂れこめた、いんうつの天氣の中で、さらに長さ五〇mの、第二六条から第三〇条までの畠地の検索に移行したが、この地点の中央部には、かつて赤松の林の中に豊かな清水が湧いていたことが幼い頃の想い出に残されているし、またさらに南の谷裾の松林の影には、現在も清澄な湧水地点があるが、

それらの水源ははるかな繩文時代の三十稻場の生活に、強く結びつくものがあつたであろう。

この地点は中央部で、点々と散在する小さな柱孔性のビットが、深さ一m前後で十数地点把握された。そして第三〇条の1・2・6・7・9・10の各区で、繩文後期の三十稻場式以降の生活炉址に属すとみられる方形の小形石組炉址が、直線上の配位置で発見されたことは、それらの炉址の包含深度によつて、均土工事からの破壊もうけずに残存したことが推定され、注目されるものがあつた。(本日の確認炉址、六基)

(19) 七月一六日 (日) 晴時々曇

参加人員 一六名

今日は竹田祐司、神林昭一氏の正副会長はじめ、若松茂、金子拓男、中島栄一、松井寛、小山増栄などの越後古代研究会の諸氏が、元気な姿で参加してくれたので、その対策に苦しんできた馬高と三十稻場の中間にある長さ約三〇〇m、幅約三〇mの最低位の水田地帯に設定した第一号地点の、大きく分割した第一条及び第二条の検索を行なうこととした。

しかし、この水田地帯は、耕作者の高木清策氏の話にも聞かされたように、四〇し五〇cmの深さの水田が多いが、処によつては点々と一m、あるいは一mをはるかにこえるかなり広い深田のあることが確認された。また両方の台地から投げ捨てられたであろう不用の生活遺棄物、殊に目標とされる土器片の処在に対してもボーリングの鋭くつくられた先端が、土器破片に突衝したとき触手に伝わるプスッとしたり、ザラツとなりする何とも表現できない感覚や、ボーリングにかすかに伝響する音感については、中間、あるいは沈澱した微粒の細砂、あるいは細砂礫の溜集点や薄い堆積地層での検索音や手にくる触角が、土器とのきわめてつよい類似性にあつて、その判別が困難であつた。しかしそれらについても、時間をかけてゆっくりした細密な調査方法によつては、目的を達しえられるよう考へられた。また深田地点の点々とした処在について

は、かつて繩文中・後期時代に、馬高・三十稻場地域に隆盛展開された古代集落の、溜水性の共同用池が何箇所かに、つくられていたようすに推定されるのであつた。

午後は最低位の水田地帯の検索を終了すると、その西側に接続する第一号地点の、第三条・四条・五条にわたる長さ一五〇m、幅二〇・四〇mの、細長い階段状の上位水田地帯と、さらに台地の東縁りを形成する長さ一三〇m、幅約一〇mの、南方に細長く延びた第六条の畑地へと検索作業をすすめたが、第三条11・12・13区地点において、やや稀薄な土器片の散布が探知され、そして第12区の崖の突端で、崩れた炉址が一基確認された。また第六条の細長い畑地は、昔かなりの遺物散布地であつた北側の大部分がすでに、包含層土の流土煙滅地点となつて、混コーム土が露呈されていた。しかし南側の第23・24・25・26区では、かなりの遺物の包含層の所在が知られ、またその中には疑似集石点が検索されたが、はつきりした炉址は確認されなかつた。(本日確認炉址、一基)

(20) 七月一八日 (火) 曇後晴

参加人員
一九名

午前中は、南三十稻場の幹線農道の南側の第四号地点、糠山のすその松林にむけて長さ六〇mの第三八条から四四条にわたる平坦な畑地の検索作業をした。しかしこの広い地域も戦後のブルトーザーによる開墾地域に属すために、第三八条の1区附近で、わずかな土器片の散布が反応されただけであつた。

また午後からは、丈の伸びきった煙草畑を避けて、煙草畑の間の狭い甘藷などのある野菜畑をねらつて、三十稻場の中心地にあたる第二号地点の第一条の11区から西方の芒原に接する24区までと、それに並接した第三号地点の第二〇条の11区から24区にわたる長い地点の検索を行なつたが、この地点は土器や、礫石などの包含がきわめて濃密で、第二号地点の第一条の12・13・16・19の各区において方形炉址が、また第三号地点

の二〇条の12区で一基、さらに15区で二基の石圓方形炉址が検索された。

(本日確認炉址、七基)

(21) 七月二〇日 (木) 快晴

参加人員 一九名

今日は快晴で、見渡すかぎりの煙草畑に小さな赤紫の房花が咲き、四方の山々が青く美しく見え、方々で
きりぎりすが鳴いていた。

作業は、三十稻場の第二号地点の第二・三・四・五・六条の西側部分の、各条とも第14区から西外郭部の
芒原に接する西端の第25区までの、野菜畑を選んで検索をはじめる。

各条とも、西及するにしたがって、遺物の包含は濃密さを増していたが、第四条の19区で、ようやく一基
の炉址を探索した。

午後三時すぎから、三十稻場の中心部、第二号地点の第六・七・八・九条の各1区から6区までの地域を、
ピツチをあげて検索がすすめられた。この地点は密集した遺物や、ピットの処在が探知され、潜在炉址も第
六条の2・4・5・6区に、また第七条の3・6区に、さらに第八条の2・4・5区で、第九条の2・3・
4区の各地点で、合計一二基のやや密集性の形相をしめして発見された。予期されてはいたが、戦果の多い
のに元気づいた作業員は、夕方まで張り切って検索をつづけてくれた。(本日の確認炉址、一三基)

(22) 七月二一日 (金) 快晴

参加人員 二三名

遺跡地帯の煙草の葉も、しだいに黄色を呈し、処々で早朝、あるいは夕方、下葉の摘みとりがはじまつて
きた。

本日は二一日の調査にひきつづいて、栗の林や、芒原を除草機で整表した三十稻場の中心部の、第二号地点の第六・七・八・九条の各7区から西方に向けて、西端の第25区までの検索を行なつた。

この地点一帯の地底には、深さ三〇・四〇cm前後に敷きつめられたように、遺物の厚く密集した包含層がひろくつづいていて、調査員も緊張の中に眼を輝やかせ、ボーリング差し込みの力も一段と活氣をおびたものとなつた。

そして石組みされた小形方形炉址の完形、あるいは崩れをみせたものが点々と検索され、その数のおびただしさから何箇所かにわたって、小孔掘査の確認が行われた。

炉址は、第六条の7・8・9区で一基づつ発見されたのをはじめ、第七条の7区で三基、9区で二基、第八条の7区で四基、8区で三基、9区で二基、11区で一基、さらに第九条の8区で三基、9区で一基、10区で崩れ炉をふくめて二基、12区で一基、14区で二基が検索され、計二七基の炉址の密集が確認され、それは驚異と、古代の堅穴住居についていろいろのことを考えさせられるのであつた。

しかしこの地点は検索が西にすすむにつれて、若干遺物包含の稀薄性がみられ、しかしながらつよい潜在分布のつながりが依然としてつづき、西端の25区まで遺物が探知されたが、西半部では炉址は検索されなかつた。

夕方ちかくになつて、さらに第二号地点の第一〇条・一一条の西側の12区から、21区までの畠地と、整表した芒原にかけて検索をつづけた。第一〇条の12区、第一一条の17区で二基、20区で一基の炉址が発見された。(本日の確認炉址、三一基)

(23) 七月二三日 (日) 小雨後晴
参加人員 二三名

午前中は、南三十稻場を東へ西に貫く幹線道路の南側の第四号地点の最西端に設定した、第四五条から八条に至るそ菜畑の検索をなしたが、この地点も戦後のブルトーザー開墾地で、第四五条の3区附近で、飛散性のわずかな土器片の検索反応があつただけで終つた。

それより三十稻場の第二号地点の、第一〇・一一・一二条の各1区から11区にわたる野菜畑と、草刈りされた芒原にかけて検索にかかつた。この五二五^{m²}の地域も、さきの二一日の調査地点に連続した区域で、三〇・四〇cmの深さに、多くのビットや、多量の遺物の密集包含が探知され、集落の中心性がつよく看取された。

第一〇条の1・2・4・5区で一基づつ、6・8区で二基づつ、また第一一条の2・4区で一基づつ、6区で二基、7・8区で一基づつ、10区で二基、11区で一基、さらに第一二条では、7区で一基、9区で三基、10区で一基、の丸形、あるいは方形の二二基の小形炉址が確認された。

また午後の三時をすぎるころから、三十稻場第二号地点の第一六・一七条の、西向した長さ九五m、17・19区の野菜畑及び整理された芒原にわたる地域の検索を強行した。この細長い地帯は、遺物はさきの中心部に比較して、若干稀薄であったが、黒色層土は西及するにしたがつて、三〇cmから五〇cmへと深さを増していた。

炉址は、第一六条の5区で二基、また一七条では7区で密接した三基の小形炉址が探索された。（本日確認炉址、二七基）

(24) 七月二十五日（火） 晴

参加人員 二二名

三十稻場第二号地点の草刈機で整表された芒原に、第一八・一九・二〇条を設定、検索をはじめた。この

附近は遺跡の北側の外郭部にかかり、また『近藤発掘』地点でもあって、やはり遺物の包含状態は、稀薄の反応をしめしていた。

しかし残存炉址は、第一八条の7・12区、また第一九条の6・7・10・11区でそれぞれ一基づつの小形炉址六基が検索された。

午後の後半になつてから、南三十稻場の第三号地点の煙草畑の間の甘藷畑に設定した第一四・一五条の第1区から8区までの、小面積の細長い地点の調査にかかつた。この地域は上表土が三〇~四〇cm前後で、遺物も稀薄な検索で終つたが、以外にも第一五条の1・2・6・7区で、完形あるいは崩れをみせた炉址が四基発見された。

さらに夕方ちかくなつて、三十稻場でも中央公民館の渡辺藤次郎君が余暇をみては製作に努めた、第三号地点の調査休憩所の松林の北側に接した西瓜・南瓜などのつくられた畑地に、第八条・九条を設け、その東側の煙草畑を除いた各6区から12区に至る小面積の地点に検索を行なつたが、稀薄な土器散布が知られ、また炉址の潜在反応もなかつた。(本日確認炉址一〇基)

(25) 七月二七日 (木) 晴時々雲

参加人員 二三名

煙草畑はいつしかすっかり緑から黄色に移り、下葉の摘葉が進行しはじめたので、午前の作業は、南三十稻場の幹線農道の南側の第四号地点の煙草の下葉がかなり摘み取られ、畦畔を人の往来もできるようになつた畑に、第三一・三二・三三・三四・三五・三六・三七条を設定、ボールを立てて検索にかかつた。

この地点も、戦後のブルトーラ開拓地で、黒色土は浅く、一〇~二五cmをしめしていた。糠山すその南地域で若干の残存遺物層を期待していたが、遺物の反応はなく、第三五条と三六条の境線上にまたがつて、

第5区から方形を呈した完形石組炉址が一基発見された。

午後から三十稻場第二号地点の東より中央部にある煙草畑に、第一・二・三・四・五条までの条区を区画し、第一条は西方に向けて、1区から10区までを、二・三・四・五条は1区から13区までを設け、煙草の下葉が摘まれて隙間のできた畦畔の間に入って、検索をすすめた。

この地域は、20cmから30cm前後の浅い上表土のためか、やや遺物の散布は稀薄をしめしていたが、炉址の捕足は第一条の2・4・5区、第二条の6区、第三条では4・6区、第四条は4・11区で、また第五条の3区などで、それぞれ一基づつ、計九基の完形、または崩れた炉址が検索された。（本日確認炉址、一〇基）

（午前一〇時ころ、調査団長の長岡市教育委員長、関口庄作氏が現地観察に来跡された。

(26) 七月三〇日 （金） 晴れたり曇ったり

参加人員
二一名

煙草畑の下葉摘みもかなりすすみ、柱骨の林と化した畑が点々と出現してきたので、南三十稻場地域の第三号地点の長さ一二〇m、24区にわたる第一六・一七・一八・一九条と、第二〇条の第1区から11区までの広い面積の煙草畑の検索にかかった。

第一六条の3区で二基、4・5区で一基づつ、第一七条の1・2区で各一基、3区で二基、4区で一基、11・12区で各二基づつ、また第一八条5区で一基、6区で二基、11・12区で各一基づつ、西側の20区で三基の炉址がやや密集性をもつて発見され、さらに第一九条の12区で一基、第二〇条の3・4区で各一基、6区で二基の完し欠した丸形、あるいは方形の小形炉址が計二十四基検索された。

この地域の西側は、濃密な遺物の包含が検索されたが、東側地域は、上表土が浅く、土器などの遺物の包

含層は、炉址の多数存在したのに比較して、やや稀薄のうちにあつた。それは浅層からくる過去の永年にわたる遺物の浮き上りも、その要因の一つであることが考えられるが、集落の作業場的なものを含まない、専生活住居性のつよい營造家屋の存在した地点のように理解されるのであつた。

検索回数を重ねる毎に、調査班はすっかり感覚的に熟練し、また西岡記録係との連絡も充分のものとなつて、かなりの能率性を發揮して、今日も黄色に染つた煙草畑の中を、横列密索しながら元気で前進をつづけるのであつた。

広い中央部の検索をすますと、疲れもみせず、三十稻場第三号地点の松林の中の休憩所の東側に設定した第一・二・三・四・五・六・七・八・九・一〇・一一・一二・一三条と、第一四・一五条の残地点の10区から、22区までの煙草畑の中に突入していった。

そして、第六条の4区で一基、第一二条の7区で一基、第一三条の3・9・10・12・13・14区で、各一基づつの完形や、崩れ炉をふくむ八基の炉址を確認した。しかしこの地点の第一条から第一〇条に至る三角地點は、やはり戦後ブルトーラーによつて開墾された第四号地点と一環の中についた地域で、混ローム地帯の第六条の4区の炉址一基は、そのときの残存址とみられるものであつた。（本日確認炉址 三二基）

(27) 八月五日 (土) 晴

参加人員 一七名

午前中は、三十稻場の第二号地点の煙草畑に、第一三・一四条の1区から、第9区までと、第一五条の1区から17区までの調査地区を設けて、ボーリングの密刺を行なつた。

この地域は、遺物包含層の深さは三〇・四〇cmで、隣接した南側の中心部より若干遺物は稀薄となつてゐたが、西側地点に及んではかなり遺物の濃厚な潜在が認められた。

第一四条の7・8区で一基づつ、また第一五条の9区からも一基の炉址を検出した。

午後から三十稻場第二号地点の除草班の草刈機で整理された芒原の第二一・二二・二三・二四・二五・二六・二七条の第1区から、西端の16区までの密刺検索を行なった。

この附近も、過去の『近藤発掘』によつて既掘された地域で、ロームまでの上表土は深さ五〇・六〇cmに達する厚さであった。予期されたようにこの地点からの検索反応はきわめて微弱で、第二一・第二二条の14・15区において若干の遺物の潜在が認められた。(本日確認炉址、三基)

(28) 八月九日 (水) 晴

参加人員

一三名

午前中は、草刈班によつて整地された三十稻場の第一号地点の水田と、三十稻場を南し北に貫く農道との間にある長さ一四〇mの、細長い急傾斜地に、27区から55区までの区画を設定して検索をはじめた。この崖地の検索は、集石が処々にあって、炉址との判別に苦しんだのであつたが、ボーリングの集中密刺や、疑似性のつよいものは小さな穿孔によつてそれを確めた結果、27区・41区・45区において、傾斜地であるがそれぞれ一基づつの石圓炉址の確認を果した。

またこの第一号地点の第六条の30区は、昭和二五年七月早稻田大学の滝口教授によつて小発掘が行なわれた地点であり、さらに27区の崖下の水田は、昭和一五年五月、オランダの考古学者、ジエラード・グローント氏の小地点の試掘がなされた地点であった。

調査班は、さらに三十稻場の北側外郭部の農道の西側及び北側に第二八・二九・三〇・三一・三二・三三三四条を設定、さらにその北側に三五・三六・三七条を区画して検索を行なつたが、この地域では、第二八条の4区で炉址が一基発見され、また潜在遺物は飛散性の稀薄反応をしめしたにすぎなかつた。

午後三時頃からさらに南三十稻場の第三号地点の、幹線農道とその北側にある浜街道との間の菱形地点に、第二一条から四六条の調査区を設定して、下葉の摘まれた柱骨林となつた煙草畑の検索を行なつた。

この地点は、西側が四〇cm、東側では戦後のブルトーザー開墾で、層土は混ロームの二〇cmの浅い地層をしめし、またその間に三箇所の昭和四三年八月の発掘地点をふくむために、遺物包含の原層は、第二一条から二四条までと、第三二条から四三条までの小地点で確認され、この地点では稀薄な遺物の処在性が検索されただけで終つた。したがつて炉址も、第四三条の5区と、第四五条の5区で残存した小形配石炉が発見されただけであつた。(本日の確認炉址 六基)

(29) 八月一〇日 (木) 晴時々曇

参加人員
一八名

作付けの遅れていた馬高の第六号地点も、しだいに煙草畑の葉摘みがすすみ、真木の上部だけに葉を残した畦畔の間に入つて、どうにか残り葉も傷めずに、検索作業をすすめられるようになつた。

今日はさきに調査残ししていた馬高の第六号地点の、第四・五・六・七・八・九・一〇・一一条の、東方に向けた11区から20区までと、第一二・一三・一四・一五・一六条までの、6区から20区までの広い地域の検索にかかつた。

この地点は、馬高遺跡の東側外郭部に属し、遺物の稀薄地帯とみなされてきたが、各条とも西側の中心部からの波及とみられるかなりの遺物包含層のひろがりや、点々としたビットの処在などが、第12区附近まで確認されたが、それより東側は、きわめて稀薄な遺物の存在が知られたにすぎず、また石組み炉址も第八条の8区で一基発見されただけであつた。

馬高の第六号地点の検索をすますと、南側に移動し、第一〇号地点の東に向けた大形農道に沿う南側に設

けた第一〇条、第一一条の11区から33区までの、長さ一一〇mの細長い地点の検索にかかつた。しかしこの地域は、大形農道造成のときに、南側からも削土、盛土したために、すでに上表土は失われ、混ローム層が露出、地山ロームまで二〇cmの浅さにあって、遺物反応はなく、また炉址も検出できなかつた。

これで馬高遺跡の全地域の検索調査は一応終了した。

午後は南三十稻場に移り、幹線道路の南側に設けた残地点、第四号地点の第一・二・三・四・五・六・七八条の1区から18区に至る盛りをすぎた広い西瓜畑を中心に検索をすすめたが、この地点も過去のブルトーバー開墾地に属すために、長岡科学博物館長長谷川貫一氏や社会教育課・中央公民館職員などの懸命の検索努力にもかかわらず、遺物は無反応で終つた。

夕方ちかくなつて、さらに南三十稻場の第四号地点に残された煙草畑の、第一四条から二五条までの地域を南に向けて、長さ六二mの地域の検索にかかつたが、この地点もブルトーバー開拓に属す削平地のために、無遺物、無反応の中に終つた。

そして最後に、永い調査期間中三十稻場休憩所として利用してきた往昔の浜街道に沿う三角地点の松林に、第三号地点の第四・五・六条を延長して、各区とも第6区から10区にわたる小さな調査地区を設けて検索にかかつたが、この地点は若干の遺物の包含が確認され、また疑似炉址的な集石地点も検索された。（本日確認炉址、一基）

(30) 八月一八日 (金) 晴

参加人員 九三名

(31) 八月一九日 (土)

晴れたり曇つたり

参加人員 九四名

一八・一九の両日は、昨年秋の土地改良の幅六mの農道工事によつて分断破壊された、馬高の第五号地点と第六号地点の間の、東向道路の土盛りのために削揚土された残溝の底部をねらつて、長さ五〇m、幅二一四mのトレーンチを設定して、その整理発掘を行なつた。（発掘編一馬高B地点発掘の項－参照）

また三十稻場においては、さきにも述べたように、遺跡台地の東側を南へ北に貫いている幅一・五mの作場道を、畑地整備事業計画において、農耕面からの要求による六m幅の農道に拡張することや、また三十稻場遺跡の中央部を斜めに南へ西に向けて貫く農道案等の、強い計画希望がしめされたが、これらの農道計画が三十稻場遺跡台地の中心部や水田にのぞむ傾斜角部に当り、遺跡の密集集落の大形破壊を伴う公算が明らかになつたために、昨秋以来、新潟県教委文化行政課・長岡農地事務所・関原町土地改良組合・長岡市教育委員会・馬高遺跡保存会などの代表者が度々協議を重ね、ようやくこの新設農道案を一部中止したり、また水田に接する崖の斜面下部に移動することによつて協議が成立したために、変更農道の計画敷地内の遺物の潜在状況を、ボーリング検索をし、その後、芒、雜木の茂る崖の中面に、「三十稻場B地点」を設定して発掘を行なつた。（発掘編一三十稻場B地点の発掘－参照）

（一八日は、文化庁の小林達雄技官・新潟県文化行政課長・本間嘉晴氏及び同課員・馬高・三十稻場遺跡緊急調査団長の関口庄作氏・岸教育委員や、山崎同総務課長等の現地視察及び遺跡についての種々の協議がなされた。）

(32) 九月三日 (日) 晴

参加人員 八三名

八月一八・一九日の発掘に残地点となつた三十稻場のB地点東側の小斜面地と、B地点から南方へ五〇m

離れた三十稻場東崖の中腹面の、農道計画地の芒・雑木の茂る斜面を伐木、草刈機で整理し、長さ四〇m、幅四mのC地点にトレーンチを設け、二班にわかれ、遺棄性遺物の収納をして再発掘調査を行なつた。

(発掘編一三十稻場C地点発掘一参照)

(33) 九月一〇日 (日) 曇

参加人員 一一名

今日は、三十稻場台地の東崖下のB地点の九月三日掘残こしの附近の雑草地を大鎌で整理し、三角地点の発掘を行なつた。遺物は三十稻場式及び南三十稻場式の土器片が主体をなしていた。また南側から直径一・五m前後にわたる焼土地帯が検出されて、平炉址と確認された。また人員不足と日没のために崖の先端部まで発掘はできず、三角地点の突端は残地となつた。(確認平炉址 一基) (発掘編参照)

(34) 一〇月一〇日 (休日) 晴

参加人員 一三名

馬高・三十稻場の主要地点は、第二九次の調査によつて、大略検索調査を終了したが、残された外郭、あらいは若干離れた飛地性の疑似点に対しても調査の手を延す計画で、三十稻場第二号・第三号地点の西側に処在した一連の遺物密集地点と、さらに古くから「カヤバ」として残されてきた附図外地点の芒原の広い湿地帯の検索にかかつた。

この地域は、南方の糠山裾からくる湧水地脈が通じていて、夏も泉底から細砂を吹き上げて湧出する清水が点々と処在し、過去にはこの低湿地が小谷を構造していて、小さな川となつての流水がみられたことが推定され、そして三十稻場の第二・三号地点の既調査地西側に、中心地から離れて分布する遺物の濃密地点に

営まれた小さな古代住居群は、この温泉地帯に生活の給水を求めたことが推考されるのであつた。

馬高・三十稻場遺跡をふくむ小字中原や、遠藤沢の畑地改良の工事もしだいに西及するにしたがつて、この外郭地点の芒原もブルトーラーが入りはじめたので、南側の削土地帯、あるいはブルトーラーの刃先きで押し上げられた雜根の混じる地塊の中や、またテカテカに光つた堅いブルトーラーの車輪痕跡のある地点などからの遺物の摘出や、検索につとめることにしたが、動きと音響の激しい工事地帯にボールをたてて、 5×5 mの区画設定もできないので、地区無設定のまま、遺跡の遺物散布の西方限界を知るための「流し横隊」の検索をくりかえしてつづけた。そして既済の調査地点に隣接した芒原の処々において、凹石や、叩石をひろつたり、時々小さな疑似炉的な集石地点や、稀薄な土器片の露頭がみられたり、また稀少性のものではあるが、飛散遺物の潜在が検索で確認されたりして、調査図面外の湿原地点でこの日は若干の土器片などを収納したが、遺跡の中郭部から半円直径一五〇mをはるかに隔てた芒原の西端部までもに、稀薄ながら遺物分布の延長が確認されて、今さらのように数千年前のこの三十稻場で、山菜を集め、河魚や鳥獸を獲、朝、夕べに日輪を拝み、夜は月に踊つて生きとしきた人間集団のかれらの営み、生活軸輪の立体的な深さと、そのひろがりを想わされるのであつた。(確認炉址 ○基)

(35) 一一月一二日 (日) 晴

参加人員 一七名

今日は、晚秋の北国では珍しい快晴で、すでに雪を載せて青白く澄んだ東の国境の山々と、めつきり色を増した西方の道山山脈や、ちかくの糠山の紅葉が目に染みるようだ。いく日もいく日も時雨の雨の間をぬいながら、降雪前に検索調査を完了するための努力をつづけてきたが、遅々とした検索作業の進展は、まだ残された未調査地点を折り数えて、遺跡の広さをしみじみ味わいさせられるのであつた。

本日は、第三四次、一〇月三日に調査した残り地域の、三十稻場の西と北部に残された湿原地の芒原一帯の草刈り整地しながら検索をはじめたが、この広い地域は、時おり微細な土器片の検索反応があつただけで終り、三十稻場遺跡の西と北外郭の野地に対する遺物の分布限界がよく確認された。（本日確認炉址 ○基）

(36) 一一月二三日（休日） 晴時々曇

参加人員 一四名

三十稻場の第一号地点の東側水田をめぐる最南地点の崖地で、松・雜木・芒の茂る叢林地帯の密生部が整表草刈りされると、長さ九〇m、幅二五m前後の傾斜地のボーリング検索を行つたが、この地域は自然礫石の反応がかなりつよく、遺物は微弱な潜在土器片の検索触感だけで調査は終つた。

また午後からは、南三十稻場第四号地点の傾斜面につづく附岡外の西側の広い雜林地域が、ブルトーラーによつて削平地化されたので、この地域の荒い任意検索をすすめたが、西糠山裾の養鯉池のある細い入谷の東側の畠地で、少量の繩目の施された厚手土器片が採集されただけであつた。（本日確認炉址 ○基）

(37) 一二月五日（火） 曇時々晴

参加人員 一四名

本日は、第三三次、九月一〇日の残留地点となつた三十稻場第一号地点の、やがて農道工事のはじめられる水田にのぞむ崖地の、突端三角地点の伐木と、除草・採根をすませると、直に整理発掘にかかつたが、傾斜裾の最低地点のために、堆積流土の上表の黒色土層が一m以上の厚さにあつて、地元の馬高保存会を中心とした小人数の発掘作業は、予想外に難行したが、この狭い地点から崩れた石圍炉址が一基と、平箱で四し五枚の土器片が検出されたが、その多くは繩目を主体とした三十稻場式に属する大形深鉢土器などの破片であ

つた。（発掘編参照）

そして暮れるに速い初冬の夕方、北風が身にしみてくる午後四時、この小さな残地点の整理発掘を最後として、四月以来、断続してきた馬高・三十稻場の今次調査を終了した。（本日確認炉址 一基）

◇ 検索調査のむすび

測量で開始された馬高・三十稻場遺跡の調査も、四四回の出動によつて、検索・処理発掘を経過して、二月五日ようやく一段落をつげたのであつたが、それは見渡すかぎりの煙草畑が、苗木のみどりからしだいに黄色へと移る短い時日の、たくましい植物生命の生長さとの競走ともいえるものであつた。そして附図二の如く馬高においては、一、八五三区画、四六、三二五^{m²}。三十稻場では、一、八三六区画、四五、九〇〇^{m²}。合計、三、六八九区画、九二、二二五^{m²}。の地域にわたつて、遺物層土の潜在する深さ、濃密度、あるいは疎薄な点々とした包含分布状態と、その広がりと、大し小のビット、単独石礫、疑似集石地点はじめ、馬高遺跡で八一基。三十稻場遺跡では一五八基という石組みされた炉址の現存所在が確認された。またその検索面積については、区画無設定の外郭、あるいは飛地点の検索地、約五〇〇区画にひとしいものをふくむと、今次の実調査面積はかなりのものとなつた。

しかしこのような密刺した検索調査も、遺跡・遺構に対する一応の輪郭を把握しえたものではあるが、まだ多くの不備・不整点を残しているし、殊に作物に被害を与えないために、検索をひかい目にした畦の高い煙草畑には、まだかなりの配石炉址の検索洩れが推考されることや、石組みしない焼土地点の平炉の所在についてでは、覚触しえない無力さにあつたこともやむをえないものであつた。

繁雜性からと、盗掘資料となることを防ぐために公開性の報告書から除外したが、個々の小区内におけるピット、単獨性の礫石の所在、炉址、疑似炉的な集石地点などの確認されたものについては、細密な位置、

大きさ、深さ及び、特に土器包含層土の細かい分類が、記録野帖に残されているが、これは将来の遺跡保存のために重要な資料として残されるものであつて、後日さらに充分の整理を行う考え方である。また検索の測量原点については、調査の余暇をみて、調査事務主任の西岡・渡辺・長田・相田君らによつて、十二箇所に『長岡市』記銘のコンクリートの杭が打ちこまれた。（附図二の×印箇所）次にボーリング検索によつて集積された数字をしめす。

調査集計表

No.1

地 点		調査区画数	規 模	配石炉址	破壊炉数(土地改良工事による)
馬 高	第 1 号地点	75 区	5m × 5m	0 基	0 基
	第 2 号地点	64	"	1	2
	第 3 号地点	194	"	6	4
	第 4 号地点	116	"	10	9
	第 5 号地点	47	"	6	0
	第 6 号地点	464	"	17	0
	第 7 号地点	206	"	12	0
	第 8 号地点	117	"	10	3
	第 9 号地点	323	"	14	4
	第 10 号地点	248	"	5	3
小 計		1,853 区		81 基	25 基

(昭 48. 3. 1)

調査集計表

No.2

地 点		調査区画数	規 模	配石炉址	破壊炉数(土地改良工事による)
三 十 稻 場	第 1 号地点 (水田を含む)	245 区	5m 幅	4	0 基
	第 2 号地点	586	5m × 5m	103	0
	第 3 号地点	462	"	44	0
	第 4 号地点	543	"	7	1
	小 計	1,836 区		158 基	1 基

(昭 48. 3. 1)

調査集計表

No.3

遺 跡	調査区数	規 模	配石炉址数	要 项
昭 和 4 3 年 発 掘	区	(平炉を含む)	26 基	発掘面積 1,771 m ²
土地改良破壊炉数			26	昭和 46-47 年
昭 和 4 7 年 発 掘		(平炉を含む)	11	(今次調査)
馬 高 検 索 調 査	1,853		81	"
三十稻場検索調査	1,836		158	"
合 計	3,689 区		302 基	

(昭 48. 3. 1)

今次の馬高・三十稻場遺跡の調査は、『遺跡の保存』のために、広大な地底に眠る一集落廢墟の実体把握が目的とされるものであつて、できうるなら寸地の遺物包含層もそのまま残したい念願で、発掘一即破壊を極力避けえたいと思つたが、前にも記したようにこの地域の畠地改良工事の進展と、連絡の不充分さなどから、その一部地点にブルトーラーの浸入をみたために、遺跡保存の立場と、農地改良側との利害が対立し、その後の協議による遺跡地帯の均土工事の中止、農道の遺跡中心部を避けての設計変更のためと、昨秋からの破壊地点のやむをえない処理や整理の発掘を、心ならずも行なうことになつた。次に発掘の日程順序にしたがつて記述する。

三十稻場 A 地点 (附図四七参照)

五月二七、二八日の雨天の両日、糠山裾の南三十稻場を東・西に貫いている旧浜街道の細道に沿つて敷設される幅八mの幹線農道の敷地内を発掘することになつた。このA地点は、昭和四三年八月の発掘調査地点の南側に接続し、地形は西に向つてゆるく傾斜し、若干の遺物包含層の南方への延長と、何基かの炉址の残存が推定される地域であつた。

打杭された農道敷地内に、幅八m、長さ六〇mの地点を選定し、道路敷を縦に長く半割して、北側を第一トレンチ(以下、Tの記号を用いる)とし、南側を第二Tに分割、各Tとも二m幅(長さ四m)に、第1区から30区までの小区を設定して発掘作業をすすめた。

西・北方向にゆるく傾斜するA地点の地層の堆積は、東側においては深さ二〇cm前後のゆるく傾斜した平坦性の黒色表土によつて覆われていたが、この層土は西及するにしたがつて厚さを増し、西側の第1区から7区附近では七〇cmから八〇cmに達していた。またこの黒色表土の下には、一〇cmから二〇cmの褐色をおびた混ローム層が挿在し、さらにその下層は黄・赤色を呈する細粒の堅い基盤ロームとなつていて、この附近

も戦後のブルトーラーによる開墾地に属するのであつたが、その西半部は以外にも三重の層土が攪乱もうけによく原層序を残していた。遺物包含層はローム基盤との間に一〇~一五cmの間層をもちながら、西側では約六〇cm前後の深さを保っていた。しかし東漸するにしたがつて、包含層はトレント中央の第18区附近でしだいにうすくなつて消滅し、それより東側の第30区に至る地点は、完く無遺物地帯となつていた。

○ 遺物の包含と遺構

第一T

第一Tでは、第1・2・3区で稀薄な土器片の散乱がみられただけで終り、4区においてはやや密集した一群の土器が摘出された。また昭和四三年三月の発掘調査で、大形深鉢を二箇接着して埋め、その外側を小礫で囲つた稀例のダルマ形炉址が発見された地点から、約六m南側の第9区の中央辺から、図版一五・2附図三の左上にじめした長さ六〇cm、幅五〇cmの典型的な方形の石組み炉址が発見された。しかしこの周辺からの遺物出土は稀薄であつたが、隣接した10区の北側からは縄文後期後半に属す土器破片が、一群をなして出土した。また13区の北側から小礫石を用いた崩れ炉址が一基発見された。

第一Tは、8区から13区にかけて以上の二基の炉址が確認されて、その中心性が判明したが、石器類はじめその他の遺物が稀薄性をしめしていて注目されるものがあつた。また以下の14区から東端の30区に至る地点からも、ほとんど遺物の出土はみられなかつた。

第二T

第二Tにおいては、2区の南壁ちかくで、小礫を配置した円形炉址（図版一六・1）が一基露呈されたが、その北縁りにかけては、口径三五cm前の大形深鉢が垂直に埋められていた。このような埋甕炉については、焼石投入の煮沸用器の説があるが、この深鉢は縄文の施された三個体分の廃物的な大形破片を、一箇体分に組み合わせたものであつて、土器の中は灰をふくんだ赤色の焼土が充満していて、火壺性の用途のものと推

定された。

3区・4区・5区ともに南側から中央部にかけて、やや密集した土器片が出土したが、その中に附図五、六及び7の縄文後期末葉に属す小形の壺、あるいは注口性の口辺の欠けた二点の土器と附図五、9の鼓形の耳飾りがふくまれていた。

6区においても南壁に近い地点から、中形の深鉢を南縁ににともなつた円形炉址が一基発見され、またつづいて第7区において、小礫を配した二つの円形炉址（図版一六、12）が一五cmといきわめて接近した連立位置で検出されて、ダルマ形炉址と関連性の様式にあるものと理解された。

第10区でも、南壁に接近した地点で崩れた配石炉址が発見され、その周辺から附図五、8の小さな鉢形土器と、小量の土器片が収納された。さらに13区においても、若干崩形した円形の配石炉が出土し、周囲から稀少の土器片が伴出された。また16区北側からも、集石状を呈した崩れをみせた小形の炉址が摘出された。これらの遺構が西側地域に密集して発見されたのに対して、18区から30区までの地点では無遺物の空白状態がつづいていた。

第2Tにおける南壁線上の六基の炉址の連在性については、集落と当時の道路に対する片影がしめされているもののようにみられ、また三十稻場の中心部にしめされる密集炉址群の片鱗性が連想されるのであつた。しかしこの第一及び第2Tの両地域に共通してみられる点は、石器類や、土器破片などがきわめて少量の潜在の中について、炉址を中心とした遺存形体がきわめて作業性のうすい専住居痕跡として把握され、さきの昭和四三年発掘の第1トレンチの残跡とつよい連続性の中にあつたことが把握されるのであつた。

○ 遺 物

検出された遺物は、平箱で一六枚ほどの少量で、主として破碎された土器片が主体をなしていたが、編年上の指標位置は、縄文後期の三十稻場式の土器片が少量と、後期の後半から末葉に至る三仏生式（加曾利B

並行) 及び塔が峰式(安行式並行)に所属する磨消繩文の纖細手法の土器がふくまれ、粗製の繩目痕跡の深鉢破片が多かつた。出土土器の少例を図版、附図五・5・6にしめしたが、口辺部の欠失したこれら小形の壺、あるいは注口土器とみられる土器は、いずれも口縁から胴部にかけて、太い単線や、後線の平行、または曲線の沈線の間に、短く細い繩文を施し、また球形を呈する胴部には、小さな突瘤が四箇、あるいは七箇が相対的に配置されていて、下部は無文平滑によく研磨されている。いずれも焼成は可良で、6は赤褐色、7は灰褐色をおびている。(図版一七・1)

また石器は、きわめて微量の出土で、わずかに先端部だけの磨石斧と、数点の凹石と、五・六片の小さな粘板岩の剥片が収納されただけであった。

(荒天の二日間、発掘をはじめて経験するという、長岡農地事務所の係員諸氏、馬高保存会の清水治三郎小林正一の正副会長や、荒木茂組合長を先頭に、二十数名の関原農地改良組合の役職員が、長岡市教育委員会教課職員・公民館職員・長岡科学博物館職員に混じって、終日雨に打たれながら発掘作業に懸命に努力されて、感謝の気持ちが一ぱいであつたが、これは遺跡と遺構、遺物の包含に対するよい体験をされたことと思われるのであつた。)

■ 馬高 A 地点

この発掘地点は、馬高の第九号地点の西崖の雜木林の中にある遺物包含地で、第一七条の7・8・9区にわたる地域に、二基の炉址の存在がボーリング検索で確認されていたが、この地点の北側にある小さい谷の埋立にからむ農地整備の工事で、この附近が削土されることとなり、五月一四日と二一日の二日間にわたつて、やむをえずその地点の処理発掘を行なつたが、第二次の二一日は、風速一八mの強風と横なぐりの雨の中の作業となつて、発掘は難渋した。

はじめは、第一七条の8区で確認されていた第一号炉址地点を基本点から再測定して、発掘を開始、さるに樹木を伐採したりその根をおこして、9区にトレンチを設けて、もう一基の第二号炉址を主軸にして発掘作業がすすめられた。（附図四し上参照）

8・9区附近はともに、ロームの基盤までの上表土は二十五cmから三〇cmの浅さにあって、褐色を呈した荒い砂質土で構成されていた。これはこの地点が西及び北の、二方の崖地にのぞむ関係からか、すでに黒色表土の大半が流失されていたようみられるのであった。

○ 第一号炉址

8区で発掘された第一号炉址は、図版及び附図四し上・中にみられるように、山林と畑の境界に樹木の根の伸長を防ぐために、幅三〇cm前後の長い溝をつくったときに、作溝による西側が破壊されて、小礫を配した炉石は崩れをみせて検出され、そのため西側の半部は原形を失っていたが、直径七〇cm前後の円形址であったことが推定された。

また炉址周辺は遺物が少なく、石器類もほとんど摘出されず、稀薄散乱した赤褐色の風化のつよい土器片が小量収納されただけであった。それらの土器片は繩文痕跡を器体に残していたが、口縁部破片の断面などから繩文後期前半に所属する深鉢性のものとみられた。

第二号炉址の東側へ一m五〇cm離れて、直径九〇cmの円形を呈した土こう性の浅いピットが、ロームに掘りこまれて発見されたが、その底部に焼土が発見されて、短期性の平炉址のようにみられた。このピットに接着した南側でも、直径六〇cm、深さ二四cmの長方形のピットが露呈された。また炉址の北側でも、直径約四〇cm前後、深さ一三・三一cmの連続した円形、あるいは橢円形の三箇のピットが確認されて、これらのピットは貯蔵的なもののように考えられた。さらに炉址の西側では、五〇cm離れて、直径一五cm、深さ三六cmの柱孔状のピットが一個発見された。

○ 第二号炉址

第一号炉址の西側の9区を中心には検出された第二号炉址（図版一八〇・同一九〇・附図四〇左）は、直径二〇cm前後の自然石と、拳大の石で二重縁に組み立てられた破石炉で、一部で若干の崩れもみられたが、ほぼ原形を残していた。この炉の形式は長さ八〇cm、横幅一mで、北側に無配石の掃出し口をもつた箕、あるいは馬蹄形を呈し、掃出口にちかい地点に、直径、深さともに二二cmの縄目の施された深鉢が、ロームに掘りこまれて埋置されていたが、火熱によるものか器体はボロボロに熱化されていた。また炉址の一m西側にも縄文の施された直径二二cmの、粗製深鉢が二個、一五cmの間隔をもつて並列して埋甃されていた。（図版一九）。そして炉の周辺から平箱で三枚ほどの破碎土器片が検出されたが、その中に少量の縄文後期初頭の三十稻場式の刺突文の土器片がふくまれていた。また石器や、剝片類は、第一号炉址床面と同じように稀少の出土で終つたことは、「専住」住居的なものが強く感じられた。しかしこのA地点の炉址を中心とした周辺からは、堅穴住居らしい壁土や、判然とした柱孔配列は認められなかつた。

第二号炉址のように一方側に無配石の掃出形式を備えた炉は、越後の縄文中期の最末期から、縄文後期の最初期にしばしばみられる形態であった。また第二号炉址が三十稻場式土器を遺存した生活期の築営であつたことは、検索編でも述べたように、昭和の初期から今日まで、馬高遺跡の生活期間は爪形文土器の出現した縄文中期の初葉期から始められ、大木8B並行の土器を残した中期に至つて終るという、永い間の概念が私どもを支配してきたが、今次発掘によつて、馬高遺跡は縄文中期の末期から若干下降した後期のはじめまで持続されていたことが確認されたのであつた。

□ 馬高B地点

このB地点は、馬高の第五号地点と六号地点の間の農道がつくられたときに、農道の盛り土をするために

北側の側面の土を取つた側溝状の凹み地点で、第六号地点から北に延びてきた広い遺物包含層が、この農道の設立によつて分断された場所である。

発掘トレンチは、溝底を中心幅二m、長さ三六mを対象地点として、二mづつに区画。西端を第1区とし、東端までを18区に設定して整理発掘を開始した。

この側溝状の溝底は、道壁にちかい部分は深く、北側が浅い傾斜面をなしていて、処々に包含層を失き破つての掘り下げが行なわれ、包含層の攪乱破壊箇所が見られた。

A地点の地層の堆積序は、附図四下中にみられるように、南側の道路下は複雑な移動土の積上げが確認されたが、附図四下の右上の小図には、北側の破壊されない原層序がしめされていて、上表は二〇cm前後の黒色土によつて覆われ、その下層の第二層は、一五cmから二〇cmの暗褐色土で、遺物の包含主層であつた。またその下の第三層は、暗黄褐色を呈した一〇cmほどのうすい堆積土で、稀薄な遺物や、炭化物をふくんでいた。さらにその下位の第四層は、黄褐色の馬高台地の基盤をなす黄褐色のローム層となつていた。

○ 遺物層と遺構

西側の第1・2・3・4・5・6・7区はロームまでの上表土を失い、すでに包含層の破壊煙滅がみられ、完くの無遺物層をなしていた。

第8区の東壁ちかくで、一括された縄文中期の土器群が検出されたが、第9区も遺物の包含層土が失われていた。

第10区に至つて、深さ二五cm前後から三五cmにわたり、温存された包含層の残層が露呈され、点々と群をなしてかなりの馬高式の厚手土器片が検出されはじめるとともに、中央部分のローム直上から破壊もうけずに幸運の原形を保つた長さ一・八五m、幅八五cmの馬高式の長方形をなした配石炉址が姿を現わしてきたのでさらにトレンチを北側の畠に一m拡張してその全景を追つた。この第一号炉址は図版二二一及び附図四

下にみられるように二二個の自然円礫で構造されていたが、北側で一と二個、西側でも大略二個とみられる礫石の古代崩れがみられたが、馬高期特有の胴部がすこしふくれ気味の短柵形を呈し、炉内全面が赤色の焼土となっていた。また南側の基部には、馬高式炉址の通例とされる「火壺」と呼ばれる深鉢の埋めこみがみられるのであるが、この炉址には土器の配置はみられず、直径三五cm、深さ三〇cmの底のややせばめられた垂直孔が残されていた。これは始めから無土器孔としてつくられたものか、あるいは創基した時代に一度土器を埋伏したが、何等かの理由で土器が外づされたのかについては、孔形の下部が深鉢形に細められていることなどから、後者の理由によることが理解されるのであつた。

北側に拡張した第19区の深さ二二cmの地点から、土器破片を円板状に作出した小さな円盤土器が検出され、また北壁ちかくから一括された厚手の土器群が出土した。

さらにトレンチの東側の各区でも発掘作業がすすめられ、12区から18区に至る地点でも濃密な遺物の包含層が露呈され、その附近では南側及びさらに北側にかけても、密集包含層の傾斜延引していくことが知られたので、11・12・13・14区に北接して、2m幅のトレンチを拡張して20・21・22・23区を新設して、遺物の把握につとめた。

北側に拡張した第19区では、北壁ちかくから一括された縄文中期の厚手土器群が発掘された。

第一号炉址の発見された10区の東側にある第11区では、住居の内部に当つているためか、全面に遺物や、木炭の細粒片が検出され、また直径四〇cm前後の自然石をはじめ、大小の当時の持込みとみられる礫石が点々と摘出されたり、南と西隅から直径三〇cm、深さ三〇cmの柱孔性の垂直に掘りこまれたピットが発見された。

12区では、西側の半部は遺物の散布が断絶し、稀少の土器碎片の検出で終つたが、東半部ではまたおびただしい遺物や、焼石や、小さなピットが出現したり、一括された土器が、いくつかの群れをして摘出された。

南し東の隅の深さ二五cmと三八cmの狭い地点から、土器片に混つて二点の青黒色粘板岩製の打製石斧が発見された。

12区の北面に接着した第20区でも、12区からの遺物のひろがりが延びていて、多くの土器片の散布があり、西壁ちかくから小欠した幅二・七cmの蛇紋岩の小形磨製石斧と、凹石などが発見された。

第13区及びその北面に設定した22区は、遺物がきわめて稀薄となつて、西側からの遺物包含層の伸張が中絶し、飛散性の少量の厚手土器片の摘出で終つたが、13区では中央部の南壁をなす農道の下にむけて、一括された縄文痕跡の土器が検出され、また中央辺から附図五上、4・5の二点の三角土版図版二二・2がつづいて出土し、またすぐその南側から図版二二・2附図五上3の頭部を消失した板状土偶の胴が発見され、その集中性に注目されるものがあつた。

第14区及び北接した23区では再び遺物の包含層が出現し、かなり多くの土器碎片群が点在していた。14区の北側で、深さ二九cmの地点から、剝片状のブレードが検出され、また同地点の四一cmの深度で、撚糸文を縦に施し、口辺部粘土の折返しづくりの復元可能な中形深鉢と、打製石斧が出土。さらに中央部から附図五上、2の円筒形の小鉢が発見され、また23区の西し南隅に、直径五〇cmの集石群がみられた。

15区も、木炭の細粒をふくんだ層土の中から、かなり多くの破碎土器片が出土し、また農道側の南壁ちかくから一括された数群の土器片が収納され、またさらに約三〇cm離れた地点から、附図五上1にしめす小形波状口縁で、全面に無節縄文の施された完形の小形深鉢が検出された。

第16区も、区内全面におびただしい土器破片、焼石などが散在し、東側から大形土器の破片の間に挟在して打製石斧が二点検出され、さらに東し北隅で一個体とみられる火焰D形式の深鉢土器が小さく密集して出土し、また中央部では凹石が摘出された。

第17区では、遺物は若干稀薄性をしめしたが、依然として木炭粒をふくむ包含層土がつづいていて、中央

部で打製石斧が一点検出され、また東壁ちかくで土器の密集点が発見された。

第18区も遺物はやや稀薄となつていて、17区の東側の包含地点につらなる一連の、土器の密集が西側で発見され、また西し北隅で鋭尖な石鎌が一点検出された。

以上が馬高北辺のB地点で、第1区から23区にわたる地域の整理発掘の概況であつて、この発掘結果からは、第10区の第一号炉址を中心とした一戸の住居の所在が確認され、また東側の14・15・16区に南接した農道の下に、もう一基の炉を中心とした堅穴住居の存在が、つよく推定されるのであつた。また第一号炉址はそのまま覆土して埋蔵しておいた。

○ 遺 物

馬高B地点の、農道ぞいの側溝底に設定した細長い小さな発掘地点から、収納された遺物は平箱で二三枚であつた。

出土物には、土偶の胸部破片、三角土版、円盤土器などの小量の土製品はじめ、越後の繩文中期の第三期から、第五期にわたる所属物が主軸をなしました阿玉台式系（附図二四-1）の微量の土器片もふくまれていて、その中には火焰D形式及び、微量の火焰A式の鶏頭冠の一部をなす鋸歯部分（図版二三-1上中）や、平口縁、あるいは波状口縁の深鉢や、浅鉢などの破片が所在していたが、それらの多くの土器片にまじって、微量の繩文中期初葉の爪形文の施された小土器片（図版二三-1）や、また繩文後期初頭の三十稻場式の甕形土器の頸部にめぐらされていた細い隆帯に、小さく丸い竹管の押点が施された小破片がふくまれていたことは、その量がきわめてわずかなものであつたとしても、それは馬高台地に展開された集落設営の最終末をしめす歴史的な年月経過を指標するものであつて、それらの資料を集約帰納することによつて、この遺存地

が繩文中期初葉から後期の初頭にまたがる長い時間の中であつたことが位置づけられるのであつた。

遺物の少例を図版、附図にしめしたが、附図五・1の波状口縁の小形深鉢は、高さ一三cm、直径一二・五cmで、うすい赤褐色を呈した粗製とみられる土器で、全面に右下りの無節の繩文が施されていて、口縁は無文平滑につくられ、その器形は胴下部から急に内屈曲して細づくりされている点が留意される。

附図五・2は、小形の深鉢で小欠していたが、赤褐色をした焼成可良の土器である。全面に施した右下りの繩文地を、同間隔をおいて縦縞状にすり消して、周囲に七本の繩文帯を残した磨消繩文を装飾している。高さ六・四cm、直径六・六cmである。

附図五・3は、赤褐色をおびた焼成可良の中形板状土偶の胸／胴部で無脚形式に属し、頭部及び手を欠失している。表裏に施された直／曲沈線は、鳥、あるいは小獸などの細い骨を工具としているように考えられるが、きわめて鋭角な沈線であって、これらの胴部図形が何を表徴するものか不明であるが、『近藤発掘』の遺物中や、また中越の信濃川沿岸沿えの遺跡から、同例物が多く出土し、また中央の腹部には、よく隆起した小さな突起がみられる。

附図五・4・5（図版二二・2）も、この地方で普遍的にみられる繩文中期遺物に属し、独立体の三角形を呈する小欠した小形の三角土版で、土偶の変形性のものとも論じられている土製品である。表面は曲折する太い没線と、細かい刺突痕で装飾され、裏面は平滑な彎曲をしめしている。

また石器については、収納された土器の量に比較して、きわめて少量のものであった。七点の打製石斧と、数点の剥片刃器と、凹石、叩石などと、わずかに一点づつという石鏃と三脚状の石匕（図版二二・2）の検出で終つたことは、遺跡における発掘地点のしめる位置によつて生じた一つの現象かも知れない。

目下出土物の整理を急いでいるが、今ここにその全貌をしめしえないために、後日発刊予定の正式報告書でその責務を果す考えである。

三十稻場B地点

三十稻場B地点は、三十稻場台地の東側を南へ北につらぬいている旧農道の拡張計画を、さらに東側の崖下に移転変更するためになされた整埋発掘地点で、八月一八・一九日、九月三日、一〇日、一二月五日の五日間、三十稻場第二号地点の第八・九・一〇・一一条の東側に当る農道下の芒・雜木の茂る傾斜地を指し、これら植物の地表整理とともに旧農道に沿つて幅二m、長さ二〇mの第一Tを設けて、二m×二mに細区画し、第1区から10区までに細分して発掘作業にかかつたが、後に傾斜地断面の地層調査のため、第2区からT字状に東方に向けて、長さ八m、幅二mの第10・11・12・13区の拡張を行つた。またさらに道路床となるその東側斜面の先端三角地点に、第二Tを設定、第1・2区に分割して作業をすすめた。(図版二五-1・2)

第一T

このB地点の地層序(附図三-下参照)の概略は、一〇cmから二〇cm前後の平坦に堆積した黒色土の第一層の下に、一五cmから三〇cmの厚さをもつ黒味をおびた褐色土の第二層が所在し、その下の第三層は、褐色を呈した厚さ五〇cmの土層があつて、その中位から下半部にかけて、炭化物をふくむ縄文後期の三十稻場式遺物の包含層が挿在していた。またその下の第四層は、黄褐色を呈していたが、やはり多く微細な木炭粒が混入する厚さ一五・六〇cmの層土がみられ、三十稻場式遺物とその下層部に縄文中期末の遺存物(図版二六-1・図版二七-2の土器)が潜在していた。しかしこれら北側の厚い平坦性の堆積原層に対して、第7区附近においては、附図三-下の小さい南壁断壁図にみられるような、目的不明の古代における移動層土が处处に認められた。またこの第一T附近は、黒色系層土が深く、旧時代には局所性の急崖をなしていたようになされた。

○ 遺物の包含と遺構

第一 T

第一 T の第 1 区東側及び南壁附近の深さ五〇 ~ 五五 cm の地点から、二群の密集土器や焼石・凹石や剝片などが検出された。

第 2 区では、深さ二〇 cm の表土層から浮き上り性の土器片が出土したが、この地点は遺物が稀薄性をしめし、西壁にそつた深さ八一 cm の地点から、三十稻場式の土器片がやや密集して凹石や、焼石などをふくめて発見された。

第 3 区は、東レ南隅の深度二〇 cm の地点から磨製石斧一点が出土し、さらに西壁直下の五〇 cm の深さから、三十稻場式の大形土器破片が集群をなして摘出された。さらに下層の一 m の深さで一括されたかなりの土器や石おもりなどが発見されたが、それらの遺物にまじって、図版一二八レ 1 、附図六レ 5 の口縁部が欠けた大形の高杯が、かなりの原形をとどめて拔出された。

4 区においては、上表土の一〇 cm の地点から磨製石斧が一点発見され、また西側の半部にわたって、深さ三五 cm の地点から、五〇 cm にわたって点々と、多くの土器、叩石、焼石、などが出土したが、さらに西レ南の偶から深度七〇 cm で、図版二六レ 1 、同二七レ 2 の繩文中期末に所属する東北地方の大木 9 形式系の、大形深鉢土器の口辺部破片が摘出されたが、それは大きな注口部が構成されていた。

この繩文中期所属の大形遺物が、三十稻場の下層地点から初例として把握されたことは、(前文でも度々触れたのは)三十稻場式土器の上レ下の層位的な新レ旧遺物の出土関連と、またこの三十稻場の地点において、すでに繩文中期末の生活が開始されていたという事実の確認から、馬高から三十稻場へと、急速一、あるいは緩慢な漸移的にか、集落が大きく移動した正確な移動時期と、その真の原因はどこにあったのか、何故にかれらが移動しなければならなかつたのか、を知るための重要な分岐点と、その前レ後の要因が秘め

られていると推考されるためである。

また第5区においては、南側で外部から持込みされたとみられる扁平な石礫や、角礫が集石されて発見され、北側や、北壁ちかくから二群になつた三十稲場式の土器が出土したが、この地点は若干遺物が稀薄のうちについた。

6区の中央部では、直径二五cm前後の石塊が集石され、褐色土中の二箇所で発見された。

第7・8区においても、表土下し九〇cmの地点から、附図三下のトレンチ図に記録されているよう、この二つの地区にまたがつた厚いロームが舌状に弯曲し、台性を呈した遺構が露呈されたが、その意図されたものについては不明に尽きていた。

第9区の中央辺では、深さ三五cmの地点から繩文後期の一群の土器破碎片が摘出されたが、しかしこの9区は概して飛散性の遺物が少量収納されただけであつた。

また最南端の第10区からは、遺物はみられなかつた。

また丁字状に東向した、第10・11・12・13区でも、若干の焼石や、礫石にまじつて飛散性の稀薄な土器碎片が少量出土しただけで終つた。

この第一丁は、遺物の出土主点が、西壁に接した深い地点から多く収納されていることと、また微細な木炭粒粉の全面に散布されていることなどから、きわめて近接した上部農道の敷下に、おそらく方形状の炉址を中心とした堅穴住居の存在性がつよく推定されるのであつた。

第二T

第一Tから約七m離れた東側の水田にちかい畦道の脇の三角形地点に、第二Tを設けたが、長さ一〇m、幅二mの第1区と、残りの三角残点を第2区として芒や、雑木を整理して発掘作業にかかつたが、この地点も流土堆積からくる包含層の深さと、雑木の根になまされて作業はすすまなかつた。

両区とも、深さ四五cmから六〇cmの地点で、遺棄性の破碎した土器片が、おびただしく検出され、第1区の南側から第2区にかけて、直径一・五mの厚い焼土地帯が露出されて、無配石の平炉址と確認された。そして第1区の西壁ちかくから、附図六・1・2・3・4の小形の高杯の脚部、あるいは土偶の片脚ともみなされる全面に細かい刺突文の施された土製品と、やはり刺突文の施された薄手づくりの小形の蓋と、また大形厚手づくりの土偶の手とみられる断片などが、やや密接して検出された。

また第二区からは、三十稻場式や、南三十稻場式の深鉢・甕・浅鉢などの破碎された土器片が、厚い層をなして多量に収納された。

○ 遺 物

B地点から検出された遺物は、平箱で三一枚ほどになつたが、年代的には縄文中期末の馬高の第六期に属す（大木9形式系）、曲波線状の大柄の隆起帶模様の間に刷消し縄文を施した大形の注口土器の破片を（図版二七・2）はじめ、縄文後期の第一期を形成する三十稻場式特有の把手と、頸部のくびれた甕形土器に刺突文や縄文を施文したものや、平鉢、あるいはきわめて薄手づくりの小形の『袖珍土器』や、また大・小の注ぎ口のつくられた注口土器、深鉢、また土製の蓋の破碎片等が主体をなして、それらの土器に施された模様は、この時代特有の各種形の刺突文をはじめ、縄目痕跡のものや、撲糸文を地文とした刷り消し縄文手法のものがあげられる。また三十稻場式に次ぐ南三十稻場式（堀之内式並行）の沈線文系の深鉢破片が若干ふくまれていた。

この地点の出土物中、注目されるものに、附図六・5にしめしたかなり不整形で後方に傾斜した大形の高杯があり、口辺部が消失しているが（遺物の整理がすすめば、欠失破片も増して、ほぼその全器形が把握されることであろう。）この高杯は赤褐色を呈し、胎土はきわめて細砂粘土で構造されているため、もろさがみられる。現存部分は高さ一六cm、厚肉につくられ、上部は深い皿形を呈し、頸部でくびれ、その下の胴

脚部は大きな傾斜のひろがりをみせ、三箇の円孔を配していて、下底は直径一〇cmをしめしていた。赤色をおびた器体は、一見はじきのような印象をうけるが、皿形の上部壁には細かい捺糸文が縦に施されていた。

附図六・1は、欠折した上部形不明の土製品の一部分で、小形の高杯の柄底部、あるいは土偶の脚片部説もあるもので、直径三cmの円筒状の柄部の下裾は、直径五・三cmに大きくひろがって椀形を呈し、その内側面は皿状に平滑に抜りこまれている。そして全身が大きく後方に傾き、全面に鋭角用具によつて、細かい刺突文が密施されている。黄褐色。(図版二九・1)

附図六・2は、直径一〇cmの一辺が欠失した小形の蓋で、頂部には小さなつまみがつけられ、弯曲した上面にはつまみを中心細かい刺突による、一本列、または二本列の刺突文が、放射状に交互に配されていて、黄褐色の焼成可良物である。

附図六・3は、直径四・三cm、厚さ二cmの円形土盤状の土製品で、中央に小さな孔がとおっている。

張り気味の表裏面には孔を中心とした放射状模様面と、全面に密施した細かい刺突文施面と、異なる二面模様を残した遺物で、またその側面は滑車状に浅く弯曲していて、繩文中期に盛行した滑車形耳飾りの流れに属す土製耳飾りであろう、三十稻場では初例のものである。また注目されることは、これら附図六・1・2・3は、一括密集して検出されたものであるが、色調・施文・焼成が同一調にあつて、同一時期に、同一原料、同一工具、同一人によつて製作されたことがつよく推定される遺物である。(図版二九・1)

また附図六・4は、長さ九cm、厚さ三cmの弯曲性をもつ突出物の欠片であつて、全面が無文、平滑によく研磨された赤褐色の土製品で、大形土偶の手部と推定されている。

以上が三十稻場B地点の発掘概況で、住居に適さぬ傾斜地とみられたが、予想外に多くの遺物が包含されたことを記しておきたい。

三十稻場C地点

C地点は、B地点から約六五mの南側に処在し、台地東崖の中位にある芒や、雜木の密生した傾斜角！四〇度の地点で、西側の上部にある三十稻場第三号地点の密集集落からの過去の投棄遺物をねらって、草刈機での整表がすむと、長さ四〇m、幅四mのトレンチを設け、縦に第一・第二Tに分割し、各区とも $2m \times 2m$ に区画細分して発掘をすすめた。（附図二、参照）

この附近の崖地は、古い時代にすでに、階段状に均平化された狭く、細長い帶状の水田、あるいは畑地に開拓された地点で、その大半以上の層土が移動攪乱されていた。しかし西側の第一Tの処々に稀少の原層土を残していく、第一T第1区の深さ四〇cmの地点から崩れた配石炉址が、木炭細粒や、焼土をふくんで検出され、その周辺から若干の土器片と、一点の石鏃と、図版三一-1の香炉形土器と、大形土偶の脚片とみられる土製品が摘出された。また3区では深さ二五cmの地点から、焼けた礫石と、朱で模様図された注口土器の破片が出土。さらに9区の北側の深さ三五cmの地点から三仏生式（加曾利B並行）の土器碎片にまじつて、図版三一-2・附図五-11の土偶の胴体が発見された。19区の北側では土器が密集して摘出されたが、その中に一点の磨製石斧がふくまれていた。

残余の第一Tの各区及び、第二丁の各区では、前記形式に属す稀薄な土器片が出土したが、まとまりや一括されるものはなく、遺物の飛散性がしめされていた。

○ 遺物

C地点からは、平箱で八枚の遺物が収納されたが、三仏生式、塔が峰式の編年に属す深鉢・浅鉢・土偶・香炉形土器などがみられ、繩文後期の後半から末葉に至る遺物が主体をなしていた。つぎに主要遺物をしめす。

附図五-10は、表面が若干粗荒した褐色の土製品で、エツフィル塔形に足をひろげた大形土偶の片脚部と

推定されるもので、断面が方形状につくられているが、その基底は円形にひろげられ、きわめて平坦に構造されていて、立像時の安定性が配慮されているもののようにみられる。そしてその各面には平行した太い沈線で、曲線や、横状直線の装飾模様が残されている。

図版三二七一・附図五七一は、高さ九cm、幅六・三cmの黄褐色を呈した土偶の胴部である。この土偶は頭部顔面と双脚が欠出していて、全影はみられないが、細密のつくりで、馬高の板状土偶よりはるかに纖細さが印象づけられる。手部は幻想的につくられ、片手がよりつよく作出されていて、胸部には二つの乳房が相よって隆起している。腹部は若干膨隆氣味で、中央には縦に小さな点線がとおっていて、妊娠線の説がある。また背面は平滑で、腰部には五mm前後の横状にめぐらした細い隆帯がみられ、左下りの小繩文が施されている。またさらにその下部も小さな繩文痕跡が表裏ともに施されていて、腰部被覆の着衣が推考される。またこの土偶にはかすかな残跡を残す朱塗り痕が確認された。焼成良。

図版三一七一・附図五七一は、外返りした口辺の一部が破損した香炉形土製品で、高さ九・三cm、直径八・六cmで、腹部は膨隆突出し、相対するその二面には、長さ一・七cm、幅三・八cmの横状橢円形の大きな窓孔をもち、口辺から胸部は中空をなしている。また平滑に磨かれた赤褐色の器壁には、小さな刻目状の模様がつけられた細い隆帯が、胸部の十文字隆帯を中心にして肩部まで施されたり、窓孔の外縁りにもつけられている。下底のひろがる部分は内面が皿状に抜ぐられて湾入し、外側の裾は幅一・二cmの小繩文の施された模様帶がめぐらされている。胎土は細密で焼成可良、ふんぱりのつよい安定性にある用器である。

以上が、五箇地点にわたる土地改良工事による破壊地点の整備と、遺跡中心部の密集地点を残すために、外郭の遺物稀薄地点に移動した農道の敷地に対する整理発掘の概要であつた。しかしそれらの外郭地域とみなされる該当小地点でも、ここにしるしたようにかなりの遺物が収納されて、所属する主遺跡地帯の片鱗が

みられるのであつた。

□ 結 語

早春の四月からはじめられた馬高・三十稻場遺跡の緊急調査も、測量七回、ボーリング検索三二回、発掘五回、合計四四回の出動と、延人員一、〇五五人の参加者によつて、一二月五日ようやく調査も一応終了をみた。そして馬高遺跡においては一、八五三区画、面積四六、三二五^{m²}。三十稻場遺跡では一、八三六区画、面積四六、九〇〇^{m²}、合計三、六八九区画、面積九三、二二五^{m²}（二八、二五〇坪）の正式調査区域と、またさらに三十稻場第一号地点の水田地帯の区積増分と、その他外郭地点の無記録地帯の一「流し検索」地点を合計するときは、すくなくとも二万^{m²}をはるかにこえる地域が密刺検索されている。そして現存配石炉址が、馬高においては八一基、三十稻場においても一五八基、合計二三九基の所在地点が確認された。しかしこの兩遺跡で昭和四三年の発掘前に実在した炉址数は、昭和四三年の発掘によつて確認された二六基と、土地改良工事によつて破壊された二六基の炉址と、さらに今次調査の三十稻場A・B地点で検出された一一基などを加算するときは、三〇二基という数字がしめされるのである。しかしこの数字は、昭和一〇年から一六年にわたつた『近藤発掘』で煙滅した炉址数や、また現存が推定される潜在『平炉』数をふくまないものであり、それらを合算したときは、おそらく五〇〇基ちかい炉址を中心とした集落廃墟の原点所在が推考されるのであるが、勿論、それは平面的なものではなく、時間の流れの中に順次改廃して営まれた総数字をしめすものであつて、集落遺跡の基本的な一つの基点として考えられることであらう。

またこのたびの調査で帰納された、遺物包含層の地点別の濃く疎地域の分布から、何箇所かに分担したり、あるいは集落形成の密集群在した実体構成が明確にされたことは、炉址の把握以上に大きな収穫といえるものであつて、これは学術的価値としても、また将来の遺跡保存に対しても重要な決め手となつてゆくのだろう。

そして以上の集計数からみるならば、縄文時代の日本の人口数が一〇七二〇万人前後の散在と推定されていること（山内清男博士推定数など）からみるならば、馬高・三十稻場の一遺跡に対する驚くべき集落人口の平面的の集中性が考えられるのである。

この遠因は、信濃川の沖積平地と、遺跡の西を流れる黒川沖積地帯の間に、北にむけて大きく突出したなだらかな関原丘陵の舌状台地の安定した立地性と、遠藤沢小谷の給水性と、幼稚な原始的栽培文化が推定される食糧源の可能性と、さらに信濃川や黒川のサケ・マス類を求めた内陸的な河川漁撈などにその主点があつたものとみられ、また南背に接する標高一〇〇mの低丘陵糠山の松林をひかえ、東と南に魚沼の八海連山や越後東山の連嶺と、西は北走する道山（どうやま）山脈と、その地平線の果てに弥彦、角田、国上の秀峰を望む、すぐれた高原的な風光日照の地にあつたことも、大集落を形成助長させた要因の一つであつたとみられるが、より重視されるものに自然の地形に区画された越後の海と、山岳地帯との中央部に立地していく、交易の中心性をなしていった地勢的な立地条件のことも第一に挙げられる点であり、またさらにそこには、原始信仰に関する何等かの宗教的な中心性の発生と、その強力な存在がつよく考えられるのであろう。

馬高・三十稻場地域における上表の被覆堆積土は、昭和初期の近藤発掘期の70cm（二尺）平均といわれていたのに比較して、その後多くの樹林が伐採され、むきだしになつた畑地は、今次の検索調査によつて、予想以上に集中豪雨や、しぐれ季節の雨水などによる永い年月の流水による自然破壊から、全般的にきわめて薄い層土の所在が確認された。これは煙草栽培の耕運機の深耕性に対しても、遺物を破壊から守るために、最低四五cmの深さが絶対必要視されているのに対しても、わずかに二〇~三〇cm前後の浅い地点に、多くの遺構や、遺物の包含帶が潛在していて、埋蔵文化財の現地保存の見地からは、まことに非観すべき現況にあ

つた。そして馬高・三十稻場の二遺跡ともに限界をこえた悪条件のもとにあることが重要事点として注目され、そのために両遺跡の中心部の早急なる特別処置が強く希望されるのである。

このような現象は、馬高遺跡の第一、第二、第三号地点の広い傾斜面一帯にみられるよう（附図二参考照）、土層の流失からくる黒色表土の下の褐色土層や、さらに下位地層の堅い赤土（ローム）基盤が露呈されていて、かつての近藤発掘時の主要遺跡地帯であったこの附近の包含層土が、完全に地上から消滅し去っていることは、よい事例をなしていて、そこには薄い表土地帯が農耕による遺物破壊の老化期から次期形状の一挙に崩雪状を呈する全包含層土の流失露呈期に移行して、遺跡の大形自然消滅といふ、遺跡の根底をゆすぶる悪惡の現実がみられるのである。そして、馬高・三十稻場遺跡の薄い層土地帯にも、現状のままでは近い将来に、必然的にこのような現実が襲来していることがつよく今から予測されるのである。

このような現象に比較して、馬高の長岡市所有地の第七号地点では、 500m^2 の小区域のものであつたが、遺跡保存会員の努力によつて、土地買収による農耕排除と、地表がススキや雜木繁茂の条件によつて、流失失土の防除が早くからなされたために、四〇~七〇cmに達する表土の原状維持、あるいは表土の増加地点がみられ、この地域には原形をとどめた多くの炉址と、おびただしい土器類を含む保存可良の遺物包含層の潜在が確認されているのであつた。

根気の限りをつくした作業員の検索調査から、その生活規模がより一段と鮮明にされた馬高・三十稻場遺跡一、この二つの遺跡は、小さな水田谷をめぐつて生存しつづけた一群の人間集団の、数百年という長期にわたつて連綿と続いた集落跡で、その性格は、現在の地名による馬高・三十稻場遺跡といふ二つに分けて理解すべきものではなく、一つの丘陵上に三百基の炉址を残した「まとまり」のなかに、かれらの生活本拠の築営が持続されたものであり、民族の創始流転期のはるかな蒼生時代に、その生存痕跡を大地に刻みつけた一連の大集落遺産であった。

そして本報告書に銘記すべきことは、帰納されたその生活規模には、かつての信州八ツ岳山麓の中部山岳地帯に、先史集落の巨大さを誇った「尖り石」あるいは「与助尾根」、あるいは横浜の「三殿台」の縄文遺跡をはるかにしのぐ雄大な集落形相がみられ、そして、その生活内容にはささやかな堅穴住居の中から「火焔土器」や、「王冠形土器」や、「三十稻場式土器」などのすぐれた原始文明の所産物を育ぐんでいった量、質ともに、日本最大級の先史集落の存在をしめすものであつたことを特記しておきたい。

本遺跡を中心とした約3km四方には、関原丘陵をとりまくように、点々と歴史的な古跡が所在している。南へ東には、越後の石器時代の終末期の古さに位置する「藤橋」の縄文晚期の新潟県下最大の遺跡があり、国道八号線の南側には、上除の転堂の縄文中期の遺跡が、そして北側には浄円寺山の上条重太夫憲家の文明年間の「上除の館址」が残されている。また関原丘陵の北端にある関原駅を中心として、広大な面積の奈良時代から平安時代にわたる数十の堅穴住居址群の「下屋敷遺跡」が水田の地下に埋もれ、土師器、須恵器の出土物が長岡科学博物館に収納されている。またその西方には、「館の腰」の中世遺構がわずかながら残存している。五反田町には、「三の輪」「瓜割り」「六衛門清水」などの縄文期の遺跡があり、高頭町の南方の高い山頂には、上杉時代の「片刈城址」が土壘などを残し、上杉の臣大能備前守の居城と伝えられている。(越後野史) また、部落の入口の谷川橋の西方台地は、「城扣」と呼ばれ、冬城とみなされる地点で、その西面の崖上からは縄文中期の遺物が出土し、長岡科学博物館に資料が所蔵されている。さらに西方に当る白鳥町の宝生寺には、新潟県の文化財に指定された「木喰上人」の木彫仏が安置され、また西隣した東宮町の東端にある八号線国道の崖上には、笛川郷、白鳥の莊時代のものと推定される鎌倉期の「中之坊の経塚」と呼ばれる高さ五m三〇cmの大形墳丘が残されている。

このような多くの史跡地を、その地形の縁辺に点在させていいる関原丘陵は、馬高・三十稻場遺跡を頂点・

主軸として、名実ともに史跡丘陵ともいえるもので、その景観は、「越後繩文風土記の丘、関原丘陵」の名をはずかじめないものがあり、昨今、馬高・三十稻場の地に「歴史公園」設立の世論が広く高まりつつあることも故なしとしないところであろう。そして、この地が「はるかなる先史の聖地」として、学術的にもまた風致観光的にも将来輝やかしき存在となるのも、国道八号線バイパスの開通とともに期待されるものがきわめて強いのである。

馬高・三十稻場遺跡の検索調査によつて、我が国最大級の埋蔵遺跡の確認がなされた現在——、今こそ長岡市民は、骨董的旧文化財観念から脱皮して、大きな観点からの故郷の山陵の地底に静かに眠る、巨大なる古代文明の廃墟・民族的な文化財の貴重性に想いをいたす時機が到来したことを知るべきであろう。そして世界に向つて、長岡市民が自らの力で、いつの時代にも、自信と誇りをしめしる「民族宝」といわれる馬高・三十稻場の地に、永遠の未来に対して、松籟の吹きわたる赤松の糠山をも含めた一大風致地区の指定や「歴史公園」の設立が、一日も早からんことを心から願うものは一人筆者だけではないのであろう。

終筆するに当り、遺跡保存や、長期間にわたつた馬高・三十稻場遺跡の検索と、緊急処理発掘の遂行などについて、諸々御教導と支援をいたいた文化庁の小林達雄技官と、新潟県議会総務文教委員長・長谷川信氏、新潟県文化行政課長・本間嘉晴氏、同課長補佐・伊藤正一氏、小林長岡市長、同斎藤助役殿につつしんで謝意を表します。

また広大な遺跡地の調査対象となつた畠や、水田関係の多くの耕作者ならびに土地所有者の皆さんと、最後まで関連事項の深かつた新潟県長岡農地事務所の所長、各課長殿及び係員の諸氏と、関原農地改良組合の荒木茂組合長はじめ、多数の同役職員各位と、土地改良工事の署建設社長及び現場の諸氏兄等から、深い理解と、絶大なる協力支援をうけたことについて、深甚なる敬意を表すとともに、さらに雨の日に、風雷の日

に、あるいは日照干天の日も断続して調査に参加されて、献身的なたゆまぬ努力をつづけてくださった越後古代研究会員、ならびに馬高・三十稻場遺跡保存会の清水治三郎会長ならびに会員諸賢と、長岡市教育委員会の関口委員長・中川教育長以下所属各機関の管理職各位をはじめ、教育委員会の事務局の総力あげた全職員の強力な支援と、惜しみない尊い流汗の御協力に心から感謝の意を表します。

また調査事務や、現場に連続出動されて、永い間、緻密の計画と、過重の健闘を尽された社会教育課の馬高・三十稻場緊急調査事務担当の山沢弘謀長・同大宮貫一・同西岡富雄の諸氏と、多くの人員及び調査用具の輸送の任を完うされた中央公民館・長岡科学博物館の車輶関係の渡辺藤次郎・長田不二夫・相田祝司・外山武・高橋正一氏等の見えざる陰の努力に厚く感謝し、さらに長期間にわたって遺跡現場で、昼食の熱い味噌汁サービスに献身された地元関原婦人会の方々と、長岡市教育委員会の女子職員の皆さんに、限りない深謝の意を表してここに報告書の筆を擱く。

昭和四八・三・一五